

徐幹中論校注(上)

池田秀三

解題

今ここに校注を加えた『中論』の撰者徐幹、字は偉長の詳しい傳記は、残念ながら現在ほとんど伝えられていない。正史にも正式には立傳されておらず、ただ『三國志』や『文選』李善注に簡単な事蹟が數度散見されるのみである。その中ではまだしも詳細なのが『魏志』二十一王粲傳の記事で、それに據れば、おおよそ次のことが知られる。すなわち、徐幹が王粲と親交があったこと、曹操に仕えて司空軍謀祭酒掾屬となり、後また曹丕幕下の五官將文學(『文選』注に引く『典略』および『文章志』には太子文學とあるが、徐幹の出仕中には曹丕はまだ太子になっておらないから、太子と稱するのは妥當ではない)となったこと、建安二十二年に疫病で亡くなったこと、および魏の文帝が彼を追慕して呉質に書てがみを與え(この書は有名なものだったらしく、裴松之注引く『典略』に再掲されているほか、『文選』卷四十二にも收録されている)、「獨り文を懷き質を抱き、恬淡にして欲寡なく、箕山の志有り。彬彬たる君子と謂ふべし。『中論』は辭義典雅にして、後に傳ふるに足る」と稱讚したことなどである。

これ以外は断片的なものだが、『魏志』二十七王昶傳に、馬援が「名の高きを治めず、苟も得るを求めず、澹然として自ら守り、惟だ道をこれ務む。其の是非する所有れば、則ち古人に託して以て其の意を見し、あらは當時に褒貶する所無し」といい深く徐幹を敬重していたことを記し、さらにまた王粲傳注引く『先賢行狀』には、「幹 清玄にして道を體し、六行脩備せり。聰識洽聞にして、翰ふでを操れば章を成す。官を輕んじ祿を忽せにし、世榮に耽らず」とある。以てその人となりと志の在るところを想見できよう。

以上が知り得る徐幹の傳記の大半であるが、ここになお一つその生平を記した文獻が存している。それは、『中論』に附された無名氏の序文である。この序の筆者は徐幹と親交のあった後輩らしく、その記事の信頼度は高い。徐幹の人格の高潔さと才能の偉大さを聲を大にして稱え、とくにその隱遁志向と道家的傾向とを強調している。もっともその内容は、基本的には『三國志』等の記述と大差はなく、別段とくにつけ加えるべきものはない。ただ建安二十三年二月に年四十八歳で亡くなったというのは、この資料による新たな知見である。王粲傳および『文選』注のいうところと一年ずれているが、むしろこの序の説のほうが正しいのではないかと思われる。^①そうすると、徐幹の在世期間は西暦一七一―二一八となる。

以上まとめてみれば、徐幹は人格識見ともにすぐれ、かつ非常な聲望を得ていた當時第一級の知識人であったということができる。その學識才能は文學、就中詩において發揮され、いわゆる建安七子の一として今日までその名聲が傳わっているが（ただし『詩品』における評價は低い）、残念なこととその業績の大半は亡失してしまっている。丁福保『全漢三國晉南北朝詩』には、疑作も含めてわずか四篇の断片を収めるのみである。またその他のジャンルの作品も、「齊都賦」等十篇ほどの賦作の断片を留めるだけであって、要するにその文學の全貌はほとんど窺うことができないのである。今日、彼の精神的營爲の迹を見ることができるのは、唯一『中論』においてのみである。が、それで彼も十分本望であろう。と言うのは、序に據れば、『中論』は詩賦頌銘贊の文を廢して著されたものであったからである。文學の創作を打ち捨て、その全精力を

この書に注いだのである。（この點において、辭賦の製作を小人のわざとして斥け、『太玄』『法言』を著したかの揚雄が想い起こされる。徐幹は揚雄の生き方に感ずるところがあったのかもしれない。事實、『中論』には『法言』の影響が隨所に見られる。）『中論』には、彼の人生における思想活動の全てが集約されているのである。

このように、第一級の知識人が全力をこめた書物であったが故に、文帝の豫想どおり、『中論』は後世に伝えられ、歴代多くの讀者を有してきた。しかし、近來の中國哲學史學界では、徐幹はあまり重視されていないように思える。通史類においてはほとんど閑却に附され、まれに項目を設けてあるものでも、その記述の量は甚だ少ない。たとえば狩野直喜『中國哲學史』では、「別に叙述すべき新説もないから省略する」として、わずか四行の紹介文があるだけである。果して彼の思想には、何らの新味も價值もないのであろうか。私はそうは考えない。『中論』全篇の主旨は、「義理を闡發し、經訓に原本して之を聖賢の道に歸す」（四庫提要）るに在り、その意味では確かに基本的には儒家思想の傳統に立脚したものであり、新思想の提出を目指してはいない。しかし、全く新味がないわけではない。その中には自ら彼独自の觀點も少なからず見られるのである。今それを詳述している餘裕はないが、二三例を挙げると、外面的整備を第一の肝要事とし、かつ技藝を重んずる修養論、歴史的事實の多少から因果應報を立證せんとする運命否定論、實立ちて名從うとする名實論などである。さらに性善説と一概に言い得ぬ屈折した様相を見せる人間觀も注目に値しよう。これらはみな、彼の生きた漢魏の際という時代ならでは産み出されなかったものである。かく考えれば、彼の思想もまさしく思想史の對象となり得るはずのものである。

そもそも私は、獨創的ないし特異な思想家のみを研究すればよいとする立場に反對である。もしそうであるとするならば、研究の價值ある思想家はほんの一握りということになってしまおう。決められた枠組の中で独自の構造をなすこと、これが中國の思想家に與えられた課題であった。従つて結果としては大同小異となるが、それが中國思想の大方のあり方であった。とすれば、なぜ大同であり續けたのかを明らかにするとともに、小異を摘出して正しく評價することが思想史研究の

最大の任務となろう。いずれにしても私は、徐幹の研究の必要性を認めるものである。

徐幹の人と思想については以上で止め、次に『中論』に關する目錄學的解説をしておきたい。

まず卷數ならびに篇數である。今本は二卷二十篇であるが、原本は篇數が二篇多く、また卷立ても異なっており、今本と同じ體裁をとるのは宋以後のことである。このことについては『四庫提要』の説が要領を得ているので、次に引用しておく。

是の書、隋・唐志皆六卷に作る。隋志又た註に云ふ、「梁、目一卷」と。崇文總目も亦た六卷に作る。而して晁公武讀書志・陳振孫書錄解題、並びに二卷に作り、今本と合へば則ち宋人の併す所なり。……曾鞏が校書の序に云ふ、「始め館閣の中論二十篇を見る。貞觀政要を觀るに及び、太宗の『嘗て幹が中論復三年喪篇を見き』と稱するに、今書獨り闕く（を怪しむ^②）。又た之を魏志に考ふるに、文帝『幹 中論二十餘篇を著す』と稱す。乃ち知る、館閣本の全書に非ざるを」と。

而して晁公武又た稱すらく、「李獻民見る所の別本、實に復三年・制役二篇有り」と。李獻民とは李淑の字なり。嘗て鄆鄆書目を撰せし者なり。是れ其の書、宋の仁宗の時に在りては、尙ほ未だ盡くは殘闕せず。鞏特り館閣の不全本に據りて之を錄に著す。相沿ふこと既に久しくして、所謂別本なる者復た見るべからず。是に於て二篇遂に佚して存せず。

二卷に併せたのが誰かは、晁公武が既に「何人の之を合すかを知らず」と云うように不明である。また今本に佚文があることは、『群書治要』に今本に見えない文章が收載されていることから確かめられる。

次は版本について。現在通行の諸本には全て曾鞏の序文がついているから、今本が曾鞏校定本を祖とすることが知られる。そしてその間の詳しい経緯はわからないが、曾鞏本を基とする朱丞本なるものが作られ、紹興二十八年に石邦哲（字は熙明）がそれを借りて校した。その石邦哲手校本を元の陸友（字は友仁）が入手し、至治三年に梓に上せた。これが『中論』刊刻の初めであり、この陸友刊本が現行諸本の直接的祖本となるが、原本はどうやら亡佚したらしく、現在その所藏を

見ない。

明代に入って、この元本は二度にわたって重刊された。その一は、弘治十五年に黃紋（字は華卿）が刊したものであり、以後の主要な版本の系統を形づくる。この黃紋本は『鐵琴銅劍樓藏書目錄』等に著録され、また現在臺北の中央研究院歷史語言研究所に所藏されている。なおこの本に都穆が序を書いているので、誤って都穆本と稱されることもある。この黃紋本をさらに重刊したのが、嘉靖四十四年刊の杜思本（以下「杜本」という）である。これは四部叢刊に收められているので、現在最も通行している本と言ってよい。そしてさらにまた杜本を翻刻したのが、萬曆二十年頃刊の程榮『漢魏叢書』本（以下「程本」という）であり、これ以降、何允中『廣漢魏叢書』（以下「何本」という）、王謨『增訂漢魏叢書』（以下「王本」という）、『子書百家』（以下「子書本」という）、『百子全書』（以下「百子本」という）と翻刻が重ねられていくのである。この系統に屬しながらも、やや獨自な位置を占めるのが錢培名『小萬卷樓叢書』本（以下「錢本」という）で、これは程本を底本としつつ、『群書治要』等に據って本文を改補してあり、詳しい札記も附されている。その意味ではなかなかの善本であるが、やり過ぎのところも少なくない。なお、『叢書集成』および『國學基本叢書』はこの本に據っている。

明代における元本重刊のもう一つは、萬曆十年、胡維新によるものであり、『兩京遺編』に收められている（以下「胡本」という）。この本には重ねての翻刻はない。さて、前の系統に屬する本と胡本とはともに元本に由來するものであるから、理論の上では全く同じテキストのはずであるが、實際にはかなりの異同がある。これはどうも杜思（實際には薛晨）が本文を校訂して改めたことによるらしく、胡本の方が元本に忠實であるように感じられる。杜思の校訂が正しい場合は勿論多いが、武斷もまた避けられないから、功罪相半ばするわけで、杜・胡二本のいずれが是か、遽かには定め難い。

ところが、この問題に決着をつけるべき一本が、ここになお残っている。それは鄭國勳『龍谿精舍叢書』（民國六年刊）に收められた、「元陸友仁本を用ひて校刊す」と稱する本である。我々はここにかの元本をそのまま見ることができるのであ

る。(但し影刊ではないから、行款などは異なっていると思われる。)無論、現在最も基本となるべき本である。ところで、この本と胡本とを比べてみると、全く同じと言っていいほど類似している。誤字俗字まではほぼ等しい。胡本が元本に忠實であることがここに裏づけられたわけであり、従って胡・杜二本の優劣も、テキストの善悪は別として、古態を存している點ではむしろ胡本の方を採るべしということになる。ただ、覆元本と胡本があまりに似かよっているが故に、また別の不安が生じてくる。それは、胡本を元本と錯覺したのではないかということである。もしそうならば、両者が同じなのは當然である。現に『兩京遺篇』本を元本と見誤った例が他書にあるし、元本の所在が不明なものこの不安を益す。がしかし、確かめる術がない以上、編者のことばを信じる他はあるまい。よって現在のところは、『龍谿精舍』本を最善とする見解を保持しておきたいと思う。

以上が諸本のあらましである。以下に凡例を記しておく。

一、本文は『龍谿精舍』本(京都大學人文科學研究所藏本を用いた)を底本とし、諸本諸書に據って校訂し、新たに制定した。底本の文字を改める場合は、全て校記した。但し、俗字誤字は原則として正字に改めたが、その場合は校記していない。

一、校記には、諸本諸書との主要な異同を記したが、あまり重要でないとと思われるものや、底本が明らかに勝ると思われるものは記していない。

一、注は、本文を読むための典據を擧げることが主としたが、單に語句の用例を示しただけのものもある。後者は本文と直接的には關連がなく、むしろ省くべきかもしれないが、本文理解の一助として敢えて記しておいた。讀者は宜しく取捨していただきたい。なお注の番號は、便宜上、該當語句の初めにつけた。

一、本文・校記・注は舊體字とし、書下し文のみ新體字もしくは通行字體を使用した。

先に述べたような観点から、この書の校注を進めてきたのであるが、最近になって梁茂榮氏の『徐幹中論校釋』（一九七九、臺北）が出版された。それを見たとき私は、もうこの校注が無用になったと感じたのであるが、實際に読んでみると、私のと同じ部分も勿論多かったが、不適當不十分な箇所も少なくないように思われた。それで敢えてここにこの稿を提出することとした。讀めない箇所がいくつもあった。また讀めたつもりの部分でも、不用意な誤謬をいくつも犯しているであろう。博雅の君子の批正を乞い願う。

注

- (1) 以上、吉川幸次郎「三國志實錄 曹植兄弟」（全集第七卷一一七—二四頁）参照。ただ氏は、二十二年に陳琳らとともに没したとして序を誤りとされるが、私は二十二年に發病して年明けすぐに亡くなった

とみてよいのではないかと思う。

- (2) 曾鞏の原文に據りて補う。

- (3) 『龍谿精舍』本にもこの札記が附されているが、その目録には陳鱣の撰としてある。なぜ陳鱣とするのかは不明である。

予以荀卿子孟軻懷亞聖之才。著一家之法。繼明聖人之業。皆以姓名自書。猶至於今。厥字不傳。原思其故。皆由戰國之世。樂賢者寡。同時之人。不早記錄。豈況徐子中論之書。不以姓名爲目乎。恐歷久遠。名或不傳。故不量其才。喟然感嘆。先目其德。以發其姓名。述其雅好不刊之行。屬之篇首。以爲之序。其辭曰。世有雅達君子者。姓徐名幹。字偉長。北海劇人也。其先業以清亮臧否爲家。世濟其美。不隕其德。至君之身十世矣。君含元休清明之氣。持造化英哲之性。放口而言。則樂誦九德之文。通耳而識。則教不再告。未志乎學。蓋已誦文數十萬言矣。年十四始讀五經。發憤忘食。下帷專念。以夜繼日。父恐其得疾。常禁止之。故能未至弱冠。學五經悉載於口。博覽傳記。言則成章。操翰成文矣。此時靈帝之末年也。國典隳廢。冠族子弟。結黨權門。交援求售。競相尙爵號。君病俗迷昏。遂閉戶自守。不與之群。以六籍娛心而已。君子之達也。學無常師。有一業勝己者。便從學焉。必盡其所知。而後釋之。有一言之美。不令過耳。必心識之。志在總衆言之長。統道德之微。恥一物之不知。愧一藝之不克。故日夜饜饜。晨不暇食。夕不解衣。晝則研精經緯。夜則歷觀列宿。考混元於未形。補聖德之空缺。誕長慮於無窮。旌微言之將墜。何暇謹小學治浮名。與俗士相彌縫哉。故浮淺寡識之人。適解驅使榮利。豈知大道之根。然其餘以疏略爲太簡。曾無憂樂。徒以爲習書之儒。不足爲上。欣之者衆。辯之者寡。故令君州閭之稱不早彰徹。然秉正獨立。志有所存。俗之毀譽。有如浮雲。若有覺而還反者。則以道進之。忘其前之謗己也。其犯而不校。下學而上達。皆此之類也。于時董卓作亂。劫主西遷。奸雄滿野。天下無主。聖人之道息。邪僞之事興。榮利之士得譽。守貞之賢不彰。故令君譽聞不振於華夏。玉帛安車。不至於門。考其德行文藝。實帝王之佐也。道之不行。豈不惜哉。君避地海表。自歸舊都。州郡牧守。禮命踰躅。連武欲致之。君以爲。縱橫之世。乃先聖之所厄困也。豈況吾徒哉。有譏孟軻。不度其量。擬聖行道。傳食諸侯。深美顏淵荀卿之行。故絕迹山谷。幽居研幾。用思深妙。以發疾瘵。潛伏延年。會上公撥亂。王路始闢。遂力疾應命。從^(五)成征行。歷載五六。疾稍沈篤。不堪王事。潛身窮巷。頤志保真。淡泊無爲。惟存正道。環堵之牆。以庇妻子。并日而食。不

以爲戚。養浩然之氣。習羨門之術。時人或聞其如此而往觀之。或頗識其眞而從之者。君無不容而見之。厲以聲色。度其情志。倡其言論。知可以道長者。則微而誘之。令益者不自覺。而大化陰行。其所匡濟。亦已多矣。君之交也。則不以其短。各取其長。而善之取。故少顯盡己之交。亦無孜孜和愛之好。統聖人中和之業。蹈賢哲守度之行。淵默難測。誠寶偉之器也。君之性常欲損世之有餘。益俗之不足。見辭人美麗之文。並時而作。曾無闡弘大義。敷散道教。上求聖人之中。下救流俗之昏者。故廢詩賦頌銘贊之文。著中論之書二十篇。其所甄紀。邁君昔志。蓋千百之一也。文義未究。年四十八。建安二十三年春二月。遭厲疾大命殞頽。豈不痛哉。余數侍坐。觀君之言。常怖篤意自勉。而心自薄也。何則自顧才志。不如之遠矣耳。然宗之仰之。以爲師表。自君之亡。有子貢山梁之行。故追述其事。麤舉其顯露易知之數。沈冥幽微。深奧廣深者。遺之精通君子。將自贊明之也。

校記

- (一) 「售」胡本同、杜本・程本作「名」、
- (二) 病下、杜本有注云、「一本作疾、」
- (三) 「劫」胡本同、杜本・程本作「幼」、按形近而譌、然遷都時、獻帝年十、則幼字亦通、
- (四) 「王」原文作「玉」、胡本同、杜本・程本作王、今據杜本・程本改、
- (五) 「戊」疑當作「戎」、
- (六) 「千」胡本同、程本無、杜本空格、

徐幹中論の序⁽¹⁾

予^{おも}以んみるに、荀卿子・孟軻⁽²⁾ 聖の才を懷きて、一家の法を著し、継いで聖人の業を明らむるに、皆姓名を以て自書せし

も、猶ほ今に至れば厥⁽³⁾の字伝はらず。其の故を原ね思ふに、皆戦国の世、賢を楽しむ者寡なく、時を同じうするの人、早に記録せざるに由る。豈に況んや徐子中論の書、姓名を以て目と為さざるをや。恐らくは久遠を歴て、名或いは伝はらざらん。故に其の才を量らず、喟然として感嘆し、先づ其の徳を目し、以て其の姓名を發し、其の雅好不刊の行を述べ、之を篇首に属し、以て之が序と為す。其の辞に曰く、

世に雅達⁽⁶⁾の君子なる者有り。姓は徐、名は幹、字は偉長、北海劇⁽⁷⁾の人なり。其の先業、清亮臧否⁽⁸⁾を以て家を為す。世よ其の美を濟し、其の徳を隕⁽⁹⁾さず、君の身に至るまで十世なり。君、元休清明の氣を含み、造化英哲の性を持す。口を放⁽¹⁰⁾きて言へば、則ち九徳の文を誦ふを楽しみ、耳を通じて識れば、教へ再び告げず。未だ学に志さずして、蓋し已に文を誦ふること数十万言なりき。年十四にして始めて五経を読み、發憤して食を忘れ、帷を下して専思し、夜を以て日に繼ぐ。父、其の疾を得んことを恐れ、常に之を禁止す。故に能く未だ弱冠に至らずして、五経を學びて悉く口に載す。博く伝記を覽、言へば則ち章を成し、翰を操れば文を成せり。此の時、靈帝の末年なり。国典隳廢⁽²¹⁾せられ、冠族の子弟、權門に結党し、交ごも援きて售らんことを求め、競ひて爵号を相尚ぶ。君、俗の迷惑せるを病み、遂に戸を閉ぢて自ら守り、之と群せず、六籍を以て心を娛⁽²⁶⁾しましむのみ。君子の達するや、学に常師無し。一業の己に勝る者有らば、便ち従ひて焉⁽²⁷⁾に學び、必ず其の知る所を尽くして而る後之を釈⁽²⁸⁾つ。一言の美有らば、耳を過ごさしめず、必ず心に之を識⁽²⁹⁾す。志は衆言の長を総べ、道德の微を統ぶるに在り。一物の知らざるを恥ぢ、一芸の克くせざるを愧づ。故に日夜晝⁽³⁰⁾として、晨には食に暇あらず、夕には衣を解かず。昼は則ち経緯を研精し、夜は則ち列宿を歴観す。混元を未だ形れざるに考へ、聖徳の空欠を補ひ、長慮を無窮に誕⁽³¹⁾いにし、微言の將に墜ちんとするを旌⁽³²⁾せり。何ぞ小学を謹⁽³³⁾び、浮名を治め、俗士と相弥縫するに暇あらんや。故に浮浅にして識寡なきの人、適⁽³⁴⁾だ榮利に驅使するを解するのみ。豈に大道の根を知らんや。然れども其の余は疏略を以て太簡と為し、曾⁽³⁵⁾ち憂樂すること無し。徒⁽³⁶⁾だ以為ふに、書を習ふの儒、上と為すに足らざれども、之を欣ぶ者は衆くして、之を弁ずる者は寡な

し。故に君の州閭の称をして早に彰徹せしめざりき。然れども正を乗りて独立し、志存する所有り、俗の毀誉、浮雲の如き有り。若し覺りて還反する者有らば、則ち道を以て之を進め、其の前の己を謗りしを忘るるなり。其の犯さるるも校せず、³⁹下学して上達するは、皆此の類なり。時に董卓乱を作し、主を劫かして西遷せしめ、奸雄野に満ち、天下主無し。聖人の道息み、邪偽の事興り、利を営むの士譽を得、貞を守るの賢彰れず。故に君の譽聞をして華夏に振はざらしめ、玉帛安車、門に至らず。其の德行文芸を考ふるに、⁴⁴実に帝王の佐なり。道の行はれざる、豈に惜しからずや。君 地を海表に避け、旧都に帰りしより、州郡の牧守礼命もて蹶踏たり、武を連ねて之を致さんと欲す。君以為へらく、縦横の世は乃ち先聖の厄困せし所なり。豈に況んや吾が徒をや、と。孟軻の其の量を度らず、聖に擬へて道を行ひ、諸侯に伝食せしを譏ること有り。深く顔淵・荀卿の行を美みす。故に迹を山谷に絶ち、幽居して幾を研し、用って深妙を思ふ。以て疾痲を発し、潜伏すること延年なり。会たま上公乱を撥め、王路始めて闢く。遂に疾を力めて命に応じ、戍に従ひ征行す。載を歴ること五六にして、疾稍や沈篤たれば王事に堪へず。身を窮巷に潜め、志を頤ひ真を保ち、淡泊無為にして、惟だ正道を存するのみ。環堵の墻以て妻子を庇ひ、日を并せて食らふも以て戚と為さず。浩然の氣を養ひ、義門の術を習ふ。時人其の此くの如きを聞きて往きて之を觀るもの或り。頗る其の真を識りて之に従ふ者或り。君 容れて之を見ざる無く、厲すに声色を以てす。其の情志を度り、其の言論を倡へ、道を以て長ずべき者を知れば、則ち微にして誘ひ、益す者をして自覺せしめずして而も大化陰に行はる。其の匡濟する所、亦た已だ多し。君の交はるや、則ち其の短を以てせずして、各おの其の長を取り、善を之れ取る。故に顯はに己を尽くすの交少なく、亦た孜孜たる和愛の好無し。聖人中和の業を統べ、賢哲度を守るの行を蹈む。淵黙にして測り難く、誠に宝偉の器なり。君の性、常に世の余り有るを損し、俗の足らざるを益さんと欲す。辞人の美麗の文、時に並んで作らるるも、曾ち大義を闡弘し、道教を敷散し、上は聖人の中を求め、下は流俗の昏きを救ふ者無きを見、故に詩・賦・頌・銘・贊の文を廃し、中論の書二十篇を著す。其の甄紀する所、君の昔の志を邁ゆること、蓋し千百のいな

り。文義未だ窮めざるに、年四十八にして、建安二十三年春二月、厲疾に遭ひて大命殞頽せり。豈に痛ましからずや。余数しば侍坐し、君の言を觀て常に怖れて意を篤うして自ら勉めしも、而れども心は自ら薄し。何となれば則ち自ら才志を顧るに、之に如かざること遠ければなり。然れども之を宗とし之を仰ぎ、以て師表と為す。君の亡じしより、子貢⁽⁷⁷⁾山梁の行有り。故に其の事を追述し、⁽⁷⁸⁾麤⁽⁷⁸⁾ば其の顯露にして知り易きの数を挙ぐ。沈冥幽微、深奥広遠なる者は、之を精通の君子に遺す。將に自ら之を賛明せんことを。

注

- (1) 序 この序の撰者は不明であるが、内容より見て、曹操幕下の同僚で徐幹とかなり親交のあった者のようである。『四庫提要』には「又書前有原序一篇、不題名字、陳振孫以爲幹同時人所作、今驗其文、頗類漢人體格、知振孫所言爲不誣」とあり、また周中孚『鄭堂讀書記』にも「此本前有原序、不著名氏、未稱余數侍坐觀君之言云云、知即同時人所作」と云う。なお何本・王本・子書本・百子本にはこの序はない。亞聖 趙岐「孟子題辭」「可謂直而不倨、曲而不屈、命世亞聖之大才者也、」荀子を亞聖と稱した例は他に見えない。
- (2) 厥字不傳 「孟子題辭」に「字則不聞也」とあり、荀子についても卿を字とする説もあるが、不詳とするのが大方の定論である。
- (3) 雅好 猶お正善と言うがごとし。
- (4) 不刊 劉歆「與揚雄書」「縣諸日月、不刊之書、」(『方言』所載)『晉書』禮志「垂百官之法、置不刊之法、」
- (5) 雅達 鄭玄「周禮注」序「玄竊觀二三君子之文章、……斯可謂雅達廣攬者也、」(賈公彥「序周禮廢興」引)
- (6) 劇 「漢書」地理志上「北海郡、縣二十六、劇、」今の山東省壽光縣の東南。
- (7) 清亮 「後漢書」朗顗傳「清亮自然、被褐懷寶、」
- (8) 臧否 普通は善惡の意味であるが、ここは否にほとんど意味はなく、臧一字とはほぼ同義であらう。或いは否は何らかの誤りか。一説として人の善惡を批判するという意味もあるが、ここでは少しそぐわないように思われる。
- (9) 元休 他に用例が見えないが、元休ともに善、大の意。
- (10) 清明 「禮記」孔子間居篇「清明在躬、氣志如神、」
- (11) 造化英哲之性 造物者のごときすぐれて偉大な生まれつき。
- (12) 九德之文 「九德」については種々の数え方があるが、ここは多くの德ある立派なことばの意であらう。
- (13) 未志乎學 「論語」爲政篇「吾十有五而志於學、」
- (14) 發憤忘食 「論語」述而篇「其爲人也、發憤忘食、」
- (15) 下帷 「漢書」董仲舒傳「下帷講誦、……或莫見其面、蓋三年不窺園、」
- (16) 專思 「後漢書」曹褒傳「晝夜研精、沈吟專思、」
- (17) 以夜繼日 「孟子」離婁下篇「仰而思之、夜以繼日、」なお後世のものだが、『顏氏家訓』勉學篇に「廢寢而忘食、以夜繼朝」とある。
- (18) 弱冠 「禮記」曲禮上篇「二十曰弱冠、」
- (19) 成章 「三國志」魏書・陳思王傳「植跪曰、言出爲論、筆下成章、」
- (20) 國典 「禮記」月令篇「天子乃與公卿大夫共飭國典、」
- (21) 陳廢 「孟子題辭」「先王大道、陵遲陳廢、」
- (22)

- (23) 求售 『論語』子罕篇「沽之哉、沽之哉、我待買者也、」
- (24) 閉戸自守 『漢書』孔光傳「光退閭里、杜門自守。」『後漢書』馮衍傳「西歸故郡、閉門自保。」『楚國先賢傳』「孫敬閉戶讀書、」
- (25) 六籍 班固「東都賦」「蓋六籍所不能談、前聖靡得而言焉、」『文選』卷一 李善注「六籍、六經也、」
- (26) 學無常師 『論語』子張篇「夫子焉不學、而亦何常師之有、」『後漢書』班固傳「所學無常師、不爲章句、舉大義而已、」
- (27) 恥一物之不知 『法言』君子篇「聖人之於天下、恥一物之不知、」後世のものが、『晉書』劉元海傳に「一物之不知者、固君子之所恥也」とあり、また趙翼『陔餘叢考』卷四三成語の條に、「晉書、陶淵明謂范隆曰、一物不知、君子之恥」と見える。
- (28) 疊疊 『詩』大雅・文王「疊疊文王、令聞不已、」毛傳「疊疊、勉也、」『周易』繫辭上傳「成天下之亹亹者、莫大乎蓍龜、」
- (29) 晝則研精經緯云云 『漢書』劉向傳「晝誦書傳、夜觀星宿、」
- (30) 混元 張衡「應問」「混元初基、靈軌未紀、」(『後漢書』張衡傳)なお後、道家道教において主要な概念となる。
- (31) 長慮 『荀子』榮辱篇「長慮顧後而保萬世、」
- (32) 微言之將墜 『漢書』藝文志「昔仲尼沒而微言絕、」(また劉歆「讓太常博士書」に見ゆ。)なお「墜」字は、『論語』子張篇「文武之道、未墜於地」を意識するか。
- (33) 小學 名物を主とする煩瑣な訓詁の學や諸子異端の學を指すのであろう。それらに對する徐氏の批判は治學篇や考僞篇に詳しく見える。
- (34) 太簡 『論語』雍也篇「居簡而行簡、無乃大簡乎、」
- (35) 徒以爲云云 譯文では「辯之者寡」までを著者の考えとして上のごとく讀んでおいたが、以爲の主語を徐幹とみて、「徐幹は習書の儒をつまらないものと考えていた。世の人は徐幹を慕う者は多かったが、彼のために辯ずる者は少なかった」と解することも不可能ではない。
- (36) 習書之儒 いわゆる記問・記誦の學を爲し、大道を知らぬ儒者。
- (37) 有如浮雲 『論語』述而篇「不義而富且貴、於我如浮雲、」

- (38) 犯而不校 『論語』泰伯篇「有若無、實若虛、犯而不校、」
- (39) 下學而上達 『論語』憲問篇「不怨天、不尤人、下學而上達、」
- (40) 董卓作亂 『後漢書』獻帝紀ならびに董卓傳參照。
- (41) 守貞之賢不彰 『史記』禮書「循法守正者、見侮於世、」
- (42) 華夏 『三國志』蜀書・關羽傳「羽威震華夏、」
- (43) 玉帛安車 いずれも賢者を招聘するときの禮物。
- (44) 文藝 『大戴禮』文王官人篇「有隱於知理者、有隱於文藝者、」藝紀篇に「盛德之志、文藝必衆」とある。
- (45) 帝王之佐 『漢書』董仲舒傳贊「董仲舒有王佐之材、」
- (46) 道之不行 『論語』微子篇「君子之仕也、行其義也、道之不行、已知之矣、」
- (47) 海表 『尚書』周書・立政篇「天下至于海表、罔有不服、」
- (48) 蹶蹶 『論語』鄉黨篇「君在、蹶蹶如也、與與如也、」集解「恭敬之貌、」
- (49) 縱橫之世 縱橫家の活躍する、すなわち權謀術數の時代。
- (50) 傳食諸侯 『孟子』勝文公下篇「後車數百人、以傳食於諸侯、不以泰乎、」
- (51) 美顏淵荀卿之行 本文中に『荀子』を多く引用するのは、その一つの現れであろう。
- (52) 幽居 『禮記』儒行篇「儒有博學而不窮、篤行而不倦、幽居而不淫、」『後漢書』法真傳「幽居恬泊、樂以忘憂、」
- (53) 研幾 『周易』繫辭上傳「夫易、聖人所以極深而研幾也、」
- (54) 深妙 『史記』龜策傳「精微深妙、多所遺失也、」
- (55) 上公 曹操を指す。
- (56) 撥亂 『公羊傳』哀公十四年「撥亂世反諸正、莫近於春秋、」
- (57) 王路 王道に同じ。『尚書』周書・洪範篇「無有作惡、遵王之路、」『史記』儒林傳「王路廢而邪道興、」
- (58) 潛身窮巷 『韓詩外傳』卷五「大儒者、雖隱居窮巷、無置錫之地、而王公不能與爭名矣、」『淮南子』脩務訓「隱處窮巷、聲施千里、」

- (59) 頤志 班固「幽通賦」：「紀焚躬以衛上兮，皓頤志而弗傾。」『文選』卷十四
- (60) 保真 『淮南子』汜論訓「全性保真，不以物累形。」『漢書』叙傳上「若夫嚴子者，絕聖棄智，修正保真，清虛澹泊，歸之自然。」このあたりの叙述は、徐幹の道家的傾向が強調されている。
- (61) 環堵 『莊子』讓王篇「原憲居魯，環堵之室，茨以生草。」『禮記』儒行篇「儒有一畝之宮，環堵之室。」
- (62) 并日而食 『禮記』儒行篇「易衣而出，并日而食。」
- (63) 養浩然之氣 『孟子』公孫丑上篇「我知言，我善養吾浩然之氣。」
- (64) 習義門之術 『史記』秦始皇紀「始皇之碣石，使燕人盧生求義門・高賢。」集解「義門，古仙人。」また封禪書にも「義門子高」と見える。いかなる術か不明だが、恐らく不老長生の神僊術であろう。
- (65) 大化 『尚書』周書・大誥篇「肆予大化，誘我友邦君。」『漢書』匡衡傳「然後大化可成，禮讓可興也。」
- (66) 匡濟 『論衡』對作篇「著傳記，匡濟薄俗，驅民使之歸實誠也。」『三國志』魏書・賈詡傳「多所匡濟。」
- (67) 君子之交也云云 『莊子』山木篇「君子之交淡若水，小人之交甘如飴，君子淡以親，小人甘以絕。」（類似の文が『禮記』表記篇に見える。）
- (68) 孜孜 『尚書』益稷篇以下用例は多く、みな勉めて怠らざるさまである。これも『説文』に「汲汲也」と説くように、交接に務めて休むなきことであるが、よい意味には使っていない。
- (69) 中和 『禮記』中庸篇「喜怒哀樂之未發，謂之中，發而皆中節，謂之和，中也者天下之大本也，和也者天下之達道也，致中和，天地位焉，萬物育焉。」ここは中庸と言うのとはほぼ同じであろう。
- (70) 淵默 『淮南子』泰族訓「齊明盛服，淵默而不言。」
- (71) 損世之有餘云云 かなりニュアンスが異なるが、餘りあるを減らして不足に益すという發想のものに、『周易』謙卦象傳の「天道虧盈而益謙，地道變盈而流謙，鬼神害盈而福謙，人道惡盈而好謙」がある。
- (72) 見辭人美麗之文云云 美麗のみをこととし、大義を顧みない辭賦家を批判することは早く揚雄に見え、また『潛夫論』務本篇にも、「今學問之士，好語虛無之事，爭著彫麗之文，以求見異於世，……今賦頌之徒，苟爲饒辯屈蹇之辭，競陳誣罔無然之事，以索見怪於世」という道教 聖人の道の教へ。すなわち儒教のこと。
- (73) 廢詩賦頌銘贊之文 『隋書』經籍志に「魏太文學徐幹集五卷（原注、梁有錄一卷、亡）」が著録されているから、かなり多數の作品があったのであろう。（魏文帝『與吳質書』には「玄猿」「漏卮」「圓扇」「橘」の諸賦の名が見える。）自ら廢したというから、この文集は後人の編にかかるものと思われる。
- (74) 其所甄紀云云 その書の示す内容は、徐氏の昔年の志をまだほんのわずかしが著していないという意味。
- (75) 師表 『史記』太史公自序「國有賢相良將，民之師表也。」
- (76) 子貢山梁之行 未詳。「山梁」は『論語』鄉黨篇「山梁雌雉，時哉時哉，子路共之，三嗅而作」に基づくであろうが、子貢とどう結びつくのかわからない。
- (77) 沈冥 『法言』問明篇「蜀莊沈冥，……不作苟見，不治苟得。」
- (78) 李注「猶玄寂，泯然無迹之貌。」

徐幹中論卷之上

治學第一

昔之君子。成德立行。身沒而名不朽。其故何哉。學也。學也者。所以疏神達思。怡情理性。聖人之上務也。民之初載。其矇未知。譬如寶在於玄室。有所求而不見。^(三)白日照焉。則羣物斯辯矣。學者心之白日也。故先王立官掌教國子。教以六德。曰智仁聖義中和。教以六行。曰孝友睦婣任恤。教以六藝。曰禮樂射御書數。三教備而人道畢矣。學猶飾也。器不飾。則無以爲美觀。人不學。則無以有懿德。有懿德。故可以經人倫。爲美觀。故可以供神明。故書曰。若作梓材。旣勤樸斲。惟其塗丹雘。夫聽黃鍾之聲。然後知擊缶之細。視袞龍之文。然後知被褐之陋。涉庠序之教。然後知不學之困。故學者如登山焉。動而益高。如寤寐焉。久而愈足。顧所由來。則杳然其遠。以其難而懈之。誤且非矣。詩云。高山仰止。景行行止。好學之謂也。^(四)倚立而思遠。不如速行之必至也。矯首而徇飛。不如修翼之必獲也。孤居而願智。不如務學之必達也。故君子心不苟願。必以求學。身不苟動。必以從師。言不苟出。必以博文。^(五)是以情性合人而德音相繼也。孔子曰。弗學何以行。弗思何以得。小子勉之。斯可謂師人矣。^(六)馬雖有逸足。而不閑輿。則不爲良駿。人雖有美質。而不習道。則不爲君子。故學者求習道也。若有似乎畫采。玄黃之色旣著。而純皓之體斯亡。敝而不渝。孰知其素歟。子夏曰。日習則學不忘。自勉則身不墮。亟聞天下之大言。則志益廣。故君子之於學也。其不懈猶上天之動。猶日月之行。終身疊疊。沒而後已。故雖有其才。而無其志。亦不能興其功也。志者學之師也。^(七)才者學之徒也。學者不患才之不瞻。而患志之不立。是以爲之者億兆。成之者無幾。故君子必立其志。易曰。君子以自強不息。大樂之成。非取乎一音。嘉膳之和。非取乎一味。聖人之德。非取乎一道。故曰。學者所以總羣道也。^(八)羣道統乎己心。羣言一乎己口。唯所用之。故出則元亨。處則利貞。默則立象。語則成文。述千載之上。若共一時。論殊俗之類。若與同室。度幽明之故。若見其情。原治亂之漸。若指己効。^(九)故詩曰。學有緝熙于光明。其此之謂也。夫獨思則滯而不通。獨爲則困而不就。人心必有明焉。必有悟焉。如火得風而炎熾。如水赴下而流速。故太昊觀天地而畫八卦。燧人察時令而

鑽火。帝軒聞鳳鳴而調律。倉頡視鳥跡而作書。斯大聖之學乎神明而發乎物類也。賢者不能學於遠。乃學於近。故以聖人爲師。昔顏淵之學聖人也。聞一以知十。子貢聞一以知二。斯皆觸類而長之。篤思而聞之者也。非唯賢者學於聖人。聖人亦相因而學也。孔子因於文武。文武因於成湯。成湯因於夏后。夏后因於堯舜。故六籍者。羣聖相因之書也。其人雖亡。其道猶存。今之學者。勤心以取之。亦足以到昭明^(十四)而成博達矣。凡學者。大義爲先。物名爲後。大義舉而物名從之。然鄙儒之博學也。務於物名。詳於器械。矜於詁訓。摘其章句。而不能統其義之所極以獲先王之心。此無異乎女史誦詩。內豎傳令也。故使學者勞思慮而不知道。費日月而無成功。故君子必擇師焉。

校記

- (一) 太平御覽卷六〇七引作「初學則如夜在玄室所求不得」
- (二) 「立」下諸本皆有「教」字、唯胡本無、
- (三) 王本·子書本·百子本同、杜本·程本·何本、「鍾」作「鐘」、梁茂榮云、「鍾鐘、古今字、」
- (四) 「高」原文作「登」、胡本同、他本皆作高、按今本毛詩亦作高、今據諸本改、
- (五) 原文無「也」字、胡本同、他本皆有、今據諸本補、
- (六) 「倚」原文作「倦」、意林引作倚、錢本據意林改、按錢校是也、今從而改、
- (七) 「徇」原文作「狗」、程本·王本·子書本·百子本同、杜本·何本作「徇」、梁氏云、「狗、俗字、」今據杜本·何本改、
- (八) 「修翼」原文作「循雌」、意林·御覽引並作「修翼」、錢本據意林御覽改、按錢校是也、今從而改、
- (九) 「文」、胡本同、他本皆作「聞」、梁氏云、「作文恐誤、」按雖梁說似是、然作文亦通、今姑依舊、
- (十) 俞樾諸子平議補錄卷十二云、「師人無義、當作人師、謂古與爲通、可謂人師、即可爲人師、淺人不知謂之當讀作爲、因倒人師爲師人、以成其義耳、」梁氏云、「師人承上文弗學何以行弗思何以得而成義、與三人行必有我師之義同、師人即從而學也、俞說非、」按梁說似是也、
- (十一) 俞云、「志不得云學之師、師乃帥字之誤、孟子曰、夫志、氣之帥也、此語即本孟子、有志然後可學、故志爲學之主帥、而才特其徒役也、非以師徒爲喻、」梁氏云、「師與徒對言、師徒猶言主從、學以志爲主、義自可通、無煩改字、」按梁說是也、
- (十二) 俞云、「共字亦當作與、乃字之誤、若與一時、若與同室、兩文一律、」梁氏云、「共與、義同、此易字以成文、必如俞說、則同亦當作一

矣、兪說非、」按梁說是也、

(三) 「効」、胡本同、他本皆作「効」、

(四) 錢氏札記云、「到字疑當作致或至、」

学を治む第一^①

昔の君子、徳を成し行を立て、身没するも名は不朽なり。其の故は何ぞや。学なり。学なる者は、神を疏し思を達し、情を怡^やらげ性を理むる所以にして、聖人の上務なり。民の初めて載^うまるるや、其の矇^もにして未だ知ならざること、譬へば室の玄室に在るが如し。求むる所有れども見えず、白日焉^{これ}を照せば、則ち群物斯^{ここ}に弁ぜり。学は心の白日なり。故に先王 官を立てて国子^⑧を教ふるを掌らしむ。教ふるに六徳を以てす、曰く、智・仁・聖・義・中・和。教ふるに六行を以てす、曰く、孝・友・睦・婣・任・恤。教ふるに六芸を以てす、曰く、礼・楽・射・御・書・数。三教備はりて人道畢れり。学は猶ほ飾のごときなり。器飾らざれば則ち以て美観^⑩を為す無く、人学ばざれば則ち以て懿徳^⑪有る無し。懿徳有り、故に以て人倫^⑫を経すべし。美観を為す、故に以て神明^⑬に供すべし。故に書に曰く、「梓材を作るが若し。既に樸斲^{はくたく}に勤め、惟れ其れ丹腹^{わく}を塗る」と。夫れ黄鍾^⑮の声を聴きて然る後に缶^ふを撃つ細なるを知り、袞竜^⑯の文を視て然る後に褐^こを被るの陋なるを知り、庠序の教へに涉りて然る後に学ばざるの困しきを知る。故に学は山に登るが如し、動きて益ます高し。寤寐の如し、久しくして愈いよ足る。由りて来たる所を顧れば、則ち杳然^⑳として其れ遠し。其の難きを以て之を懈るは、誤りにして且つ非なり。詩に云ふ、「高山は仰ぎ、景行は行く」と。学を好むの謂なり。倚りて立ちて遠きを思ふは、速かに行くの必ず至るに如かざるなり。首^㉒を矯めて飛ぶ^㉓を徇^{もと}むるは、翼を修むるの必ず獲るに如かざるなり。孤^{ひとり}り居りて智を願ふは、学に務むるの必ず達するに如かざるなり。故に君子 心苟くも願はず、必ず以て学を求む。身苟くも動かず、必ず以て師に従ふ。言苟くも出ださず、必

ず以て文を博む。是を以て情性人に合ひて德音相繼ぐなり。孔子曰く、「学ばずんば何を以て行はれん。思はずんば何を以て得ん。小子 之を勉めよ。斯れ人を師とすと謂ふべし」と。馬 逸足有りと雖も、輿に閑はざれば則ち良駿と為らず。人 美質有りと雖も、道を習はざれば則ち君子と為らず。故に学とは道を習ふを求むるなり。画采に似たること有るが若し。玄黄の色既に著きて純皓の体斯に亡ぶ。敝れて渝らずんば、孰か其の素きを知らんや。子夏曰く、「日び習へば則ち学忘れず、自ら勉むれば則ち身墮ちず、亟しば天下の直言を聞けば則ち志益ます広し」と。故に君子の学に於けるや、其の懈らざること猶ほ上天の動くがごとく、猶ほ日月の行くがごとくにして、終身亶々として没して後已む。故に其の才有りと雖も、其の志無くんば、亦た其の功を興す能はざるなり。志は学の師なり。才は学の徒なり。学者 才の瞻らざるを患へずして、志の立たざるを患ふ。是を以て之を為む者億兆にして、之を成す者は幾くも無し。故に君子は必ず其の志を立つ。易に曰く、「君子以て自強して息まず」と。大楽の成るは一音に取るに非ず、嘉膳の和は一味に取るに非ず、聖人の徳は一道に取るに非ず。故に曰く、学は群道を総ぶる所以なりと。群道己が心に統べられ、群言己が口に一たりて、唯だ之を用ふる所のままなり。故に出では則ち元いに亨り、処りては則ち貞しきに利しく、默せば則ち象を立て、語れば則ち文を成す。千載の上を述ぶるも共に時を一にするが若く、殊俗の類を論ずるも与に室を同じうするが若し。幽明の故を度ること其の情を見るが若く、治乱の漸を原ぬること己が効を指すが如し。故に詩に曰く、「学んで光明に緝熙する有り」と。其れ此の謂なり。夫れ独り思へば則ち滞りて通ぜず、独り為せば則ち困しみて就らず。人心必ず明有り、必ず悟る有り。火の風を得て炎熾んなるが如く、水の下に赴きて流れ速きが如し。故に太昊 天地を觀て八卦を画し、燧人 時令を察して火を鑽り、帝軒 鳳鳴を聞きて律を調へ、倉頡 鳥跡を視て書を作る。斯れ大聖の神明に学びて物類に発するなり。賢者遠きに学ぶ能はず、乃ち近きに学ぶ。故に聖人を以て師と為す。昔 顔淵の聖人に学ぶや、一を聞いて以て十を知り、子貢は一を聞いて以て二を知る。斯れ皆類に触れて之を長じ、篤く思ひて之を聞く者なり。唯だに賢者のみ聖人に学ぶに非ず、聖人も亦た相因

りて学ぶなり。孔子は文武に因り、文武は成湯に因り、成湯は夏后に因り、夏后は堯舜に因る。故に六籍は群聖相因るの書なり。其の人亡ぶと雖も、其の道猶ほ存す。今の学者、心を勤めて以て之を取らば、亦た以て昭明に到り博達を成すに足れり。凡そ学は大義を先と為し、物名を後と為す。大義挙がりて物名之に従ふ。然れども鄙儒の博学や、物名に務め、器械に詳かに、詁訓に矜り、其の章句を摘みて、其の大義の極むる所を統べて以て先王の心を獲る能はず。此れ女史の詩を誦し、内豎の令を伝ふるに異ならず。故に学者をして思慮を勞して而も道を知らず、日月を費して而も功を成すこと無からしむ。故に君子は必ず師を択ぶ。

注

- (1) 學問論を卷頭に置くのは儒家の著述の傳統であり、『荀子』勸學篇・『法言』學行篇・『潛夫論』讀學篇などその先例。
- (2) 成德 『周易』乾文言「君子以成德爲行、」
- (3) 身没而名不朽 『論語』衛靈公篇「君子疾没世而名不稱焉」に基づくか(徐氏は「没世」を死後の世ととっているらしい)。なお「不朽」は、『左傳』襄公三十四年「太上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽、」
- (4) 疏神達思 精神をよくおさめて通じさせることであろう。他に用例は見えないが、これは互文であって、「疏達」は頻用の語であり、「神思」も『文心雕龍』神思篇以下、後世の文獻に多く見える。
- (5) 怡情理性 性情を和樂させて正しく治めること。現在も「怡情悦性」(或いは「適性」「養性」ともいう)が成語として用いられるようであるが、これが出典らしい。なお「理性」は『後漢書』黨錮傳に「聖人導人理性」とあるのをはじめとして、後世の文獻に多く見える。また『漢書』匡衡傳に「傳曰、審好惡、理情性、而王道畢矣」とある。
- (6) 矇 『論衡』量知篇「人未學問曰矇、」
- (7) 白日照焉云云 類似した發想のものに『潛夫論』讀學篇「夫是故道
- (8) 教國子 『周禮』地官・師氏「以三德教國子、」鄭注「國子、公卿大夫之子弟、」
- (9) 教以六德云云 『周禮』地官・大司徒「以鄉三物教萬民、而賓興之、一曰六德、知仁聖義中和、二曰六行、孝友睦婣任恤、三曰六藝、禮樂射御書數、」鄭注「知、明於事、仁、愛人以及物、聖、通而先識、義、能斷時宜、忠、言以中心、和、不剛不柔、善於父母爲孝、善於兄弟爲友、睦、親於九族、姻、親於外親、任、信於友道、恤、振憂貧者、禮、五禮之義、樂、六樂之歌舞、射、五射之法、御、五御之節、書、六書之品、」數、九數之計、」また同・保氏「養國子以道、乃教之六藝、一曰五禮、二曰六樂、三曰五射、四曰五馭、五曰六書、六曰九數、」
- (10) 人道畢矣 『禮記』喪服小記篇「親親尊尊長長、男女之有道、人道之大者也、」なお「畢矣」は、『周易』繫辭上傳「天下之能事畢矣」の表現を踏まえたもの。
- (11) 懿德 『詩』大雅・烝民「民之秉彝、好是懿德、」
- (12) 人倫 『淮南子』泰族訓「仁義之道、以治人倫、」『漢書』禮樂志「象天地而制禮樂、所以通明、立人倫、正情性、節萬事者也、」
- (13) 神明 『禮記』祭統篇「敬盡然後可以事神明、」

- (14) 書曰云云 周書・梓材篇の文。偽古文は塗を敷に作っており、皮錫瑞『今文尙書考證』は「偉長所引、今文尙書也」と云う。従ってその解釋も今文派のはずであるが、ここでは偽孔傳の解釋でもよく通じるので、今は一應偽孔傳に基づいて訓讀しておく。以下も、特に斷らない限り、同様である。
- (15) 黃鍾 『周禮』春官・大司樂「乃奏黃鍾、歌大呂、舞雲門、以祀天神、」 『禮記』月令篇「仲冬之月、……其律中黃鍾、」
- (16) 擊缶 『詩』陳風・宛丘「坎其擊缶、宛丘之道、」 『史記』藺相如傳「於是秦王不懌、爲一擊缶、相如顧召趙御史、書曰、某年月日、秦王爲趙王擊缶、」 集解引『風俗通義』「缶者瓦器、所以盛酒漿、秦人鼓之以節歌也、」(『說文』同) 按ずるに此れ民間の俗樂をいう。『文獻通考』樂考・土之屬雅部參照。
- (17) 袞龍 龍の模様をぬいとりした天子の禮服。三公も着すことが許されることがある。 班固「東都賦」「修袞龍之法服、」
- (18) 被褐 『老子』第七十章「是以聖人被褐懷玉、」
- (19) 庠序之教 『孟子』梁惠王上篇「謹庠序之教、申之以孝悌之義、頒白者不負戴於道路矣、」
- (20) 杳然 徐氏以前の使用例は見あたらないが、杳一字もしくは「杳杳」を遠き形容として用いた例はいくつかある。たとえば『楚辭』九章・哀郢「彼堯舜之抗行兮、瞭杳杳其薄天、」 なお後世では李・杜の詩などにその用例が見える。
- (21) 詩云云 小雅・車輦の文。『潛夫論』讀學篇に「故修經之賢、德近於聖矣、詩云、高山仰止、景行行止、日就月將、學有緝熙於光明、是故凡欲顯勳績揚光烈者、莫良於學矣」とあり、やはり好學の詩としてゐる。恐らく魯詩家の説であろう。従って訓詁にも毛詩家と異同がある可能性もあるが、毛詩家の解釋で一應通じるし、また徐氏は毛詩を學んでいたと思えるふしもあるので、今は毛傳・鄭箋に基づいて訓讀しておく。以下も同様である。
- (22) 矯首 張衡「思玄賦」「仰矯首以遙望兮、魂慄慄而無疇。」(『後漢書』本傳)
- (23) 徇飛 玄應『一切經音義』卷二五引『蒼頡篇』「徇、求也、」
- (24) 孤居 『戰國策』趙策一「夫斷右臂而求與人鬪、失其黨而孤居、求欲無危、豈可得哉、」
- (25) 身不苟動 『論語』顏淵篇「非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、」 『周易』繫辭下傳「君子安其身而後動、」
- (26) 必以從師 學問における師の重要性は荀子の力説するところであり(たとえば勸學篇「學莫便乎近其人」、また『法言』學行篇にも「師哉師哉、桐子之命也、務學不如務求師、師者人之模也」とある。徐氏はこれらの説を繼承しているであろう。なおこの句、「必ず師に従ふを以てす」と讀んでもよい。上下同様。
- (27) 言不苟出 『淮南子』主術訓「非道不言、非義不行、言不苟出、行不苟爲、擇善而後從事焉、」
- (28) 博文 『論語』雍也篇「子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫、」(顏淵篇に再見) 同子罕篇「夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮、」 なお「博文」という語は『史記』韓非傳や趙岐「孟子題辭」に見えているが、それぞれ少し意味あいが違っている。また他本は文を聞に作るが、「博聞」は『禮記』曲禮上篇に「博聞強識而讓、敦善行而不怠、謂之君子」とあるをはじめ、用例は多い。
- (29) 情性 『荀子』性惡篇「夫好利而欲得者、此人之情性也、」 他に『韓非子』功名篇・『史記』律書・『漢書』禮樂志などに用例が見える。注(5)參照。
- (30) 德音 『詩』小雅・南山有臺「樂只君子、德音不已、」
- (31) 孔子曰云云 出典不明。孫星衍『孔子集語』勸學篇に收録。
- (32) 小子 『論語』先進篇「子曰、非吾徒也、小子、鳴鼓而攻之可也、」 斯可謂師人矣 譯文では梁氏の説に従い、一應「人を師とすべし」と讀んでおいたが、かくしてこそ人の師と稱することができるといふ意味にとり、「斯ち人に師たりと謂ふべし」と讀むほうがよいかもしれない。或いはまた孔子のことばを「小子勉之」までとし、この句を

徐氏の孔子に對する評とみて、「斯れ人に師たりと謂ふべし」と讀むことも全く不可能ではない。

(34) 逸足 傳毅「舞賦」「良駿逸足、踰捍凌越。」『文選』卷十七

(35) 閑輿 『詩』秦風・駟驥「遊于北園、四馬既閑。」毛傳「閑、習也」

(36) 人雖有美質云云 『韓詩外傳』卷八「雖有良玉、不刻鏤則不成器、雖有美質、不學則不成君子。」なお馬と人を對として挙げたものとして、『荀子』性惡篇「驕驕・驕驕・鐵離・綠耳、此皆古之良馬也、然而

必前有銜轡之制、後有鞭策之威、加之以造父之馭、然後一日而致千里也、夫人雖有性質美、而心辨知、必將求賢師而事之、擇賢友而友之、得賢師而事之、則所聞者、堯舜禹湯之道也、得良友而友之、則所見者、忠信敬讓之行也」がある。

(37) 玄黃之色既著 『周禮』考工記「畫績之事雜五色、……青與白相次也、赤與黑相次也、玄與黃相次也、」

(38) 敝而不渝云云 文義未詳。下句は或いは『論語』八佾篇「繪事後素」と關係あるか。

(39) 子夏曰 出典不明。

(40) 日習則學不忘 『論語』學而篇「學而時習之、不亦說乎、」

(41) 自勉 『莊子』天運篇「此皆自勉、以役其德者也、」

(42) 日月之行 『周易』繫辭上傳「日月運行、一寒一暑、」

(43) 壹聲 序注(28)參照。

(44) 沒而後已 『論語』泰伯篇「死而後已、不亦遠乎、」

(45) 立其志 『孟子』萬章下篇「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志。」

(46) 易曰云云 乾卦大象の文。

(47) 大樂之成云云 『左傳』昭公二十年「(晏子)曰、和如羹焉、水火醯醢鹽梅、以烹魚肉、燀之以薪、宰夫和之、齊之以味、濟其不及、以洩其過、君子食之、以平其心、……先王之濟五味、和五聲也、以平其心成其政也、聲亦如味、一氣、二體、三類、四物、五聲、六律、七音、八風、九歌、以相成也、清濁小大、短長疾徐、哀樂剛柔、遲速高下、出入周疏、以相濟也、」

(48) 出則元亨云云 『周易』繫辭上傳「君子之道、或出或處、或默或語、」

「元亨利貞」はいわゆる四徳とみて並立的に讀んだほうがよいかもしれないが、世に出た場合には大いに用いられ、隠居したときにはその身を正しく守るという意味だと思われるので、譯文のごとく讀んでおく。なお「立象」は同じく繫辭下傳に「聖人立象以盡意」とあり(ただし、この「象」は下にいう「法象」を指すと思われる)、また「成文」は『禮記』樂記篇に「聲成文、謂之音」、および『白虎通』情性篇に「履道成文也」と見える。

(49) 殊俗 『晏子春秋』内篇問上「古者百里而異習、千里而殊俗、」

『淮南子』脩務訓「絕國殊俗、僻遠幽閭之處、」

(50) 度幽明之故 『周易』繫辭上傳「仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故、」

(51) 若指己効 文義未詳。自分の罪狀を自ら明らかにする意か。他本は効を効に作るが、それともよくわからない。或いは「指掌」の意かもしれぬが、それも普通は容易な意で、明白なることの比喩ではない。

(52) 詩曰云云 周頌・敬之の文。『淮南子』脩務訓に「由此觀之、知人無務、不若愚而好學、自人君公卿至於庶人、不自強而功名者、天下未之有也、詩云、日就月將、學有緝熙於光明、此之謂也」とあり、高誘注に「言爲善者、日有所成就、月有所奉行、當學之是明、此勉學之謂也」という。王先謙『詩三家義集疏』はこれを魯詩説としている。

また『潛夫論』讀學篇にもこの詩を引き、當學の謂としてゐる。

(53) 獨思 『新語』修政語上篇「夫舍學聖之道、而靜居獨思、」『論衡』實知篇「獨思無所據、」

(54) 太昊觀天地而畫八卦 『周易』繫辭下傳「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情、」この他にも伏羲の八卦制作を述べた文獻は多い。

(55) 燧人察時令而鑽火 『白虎通義』號篇「鑽木燧取火、教民熟食、養人利性、避臭去毒、謂之燧人也、」『風俗通義』皇霸篇「燧人始鑽木

取火、炮生爲熟、令人無腹疾、有異於禽獸、遂天之意、故曰遂人、
「察時令」というのは不明だが、陳立も考證するように、恐らく『周
禮』夏官・司燿「四時變國火」の注に引く『鄒子』「春取榆柳之火、夏
取棗杏之火、季夏取桑柘之火、秋取柞櫟之火、冬取槐檀之火」(『論
語』陽貨篇鄭注では『周書』とする)の類をいうのであろう。

- (56) 帝軒聞鳳鳴而調律 『呂氏春秋』古樂篇「黃帝命伶倫作爲律、伶倫
自大夏之西、乃之阮隰之陰、取竹於嶰谿之谷、以生空竅厚鈞者、斷而
節間、其長三寸九分、而吹之以爲黃鐘之宮、吹曰舍少、次制十二筒、
以之阮隰之下、聽鳳皇之鳴、以別十二律、其雄鳴爲六、其雌鳴亦爲
六、」同様の記事はまた『說苑』修文篇・『漢書』律曆志・『風俗通
義』音聲篇にも見えている。

- (57) 蒼頡視鳥跡而作書 『呂氏春秋』君守篇「蒼頡作書。」高誘注「蒼
頡生而知書、倣鳥跡以成文章、」『說文解字』敘「黃帝之史蒼頡、初
造書契、依類象形、故謂之文、」

- (58) 物類 『荀子』勸學篇「物類之起、必有所始、」『史記』孟軻傳
「水上所植、物類所珍、」

- (59) 顏淵之學聖人也云云 『論語』公冶長篇「賜也何敢望回、回也聞一
以知十、賜也聞一以知二、」

- (60) 觸類而長之 『周易』繫辭上傳「八卦而小成、引而伸之、觸類而長
之、天下之能事畢矣、」

- (61) 聖人亦相因而學也 聖人にも師があるという思想は他書にもかなり
多く見える。たとえば『潛夫論』讀學篇に「志曰、黃帝師風后、顓頊
師老彭、帝嚳師祝融、堯師務成、舜師紀后、禹師墨如、湯師伊尹、文
武師姜尚、周公師庶秀、孔子師老聃、若此言之而信、則人不可以不就
師矣、夫此十一君者、皆上聖也、猶待學問、其智乃博、其德乃碩」
『新序』卷五略同)とあり、『呂氏春秋』尊師篇にも若干人名を異に

するものの相似た記述が見られる。ただ、直接的師承を言わず、また
儒家的聖人に限定してある点において、徐氏のより觀念的正統的意識
が感じられる。

- (62) 孔子因於文武 『論語』子張篇「子貢曰、文。武之道、未墜於地、在
人、賢者識其大者、……莫不有文武之道焉、夫子焉不學」とあるのな
どに據るものであろうが、『法言』學行篇に「孔子習周公者也」とあ
るように、孔子は周公に學んだとするのがより普通である。下記の者
がいずれも天子であることよりすると、或いは孔子を素王とする春秋
學の觀念が作用しているかもしれない。

- (63) 文武因於成湯 『論語』爲政篇「殷因於夏禮、所損益、可知也、周
因於殷禮、所損益、可知也、」

- (64) 六籍 序注(25)参照。

- (65) 其人雖亡云云 『法言』吾子篇「或曰、惡觀乎聖而折諸、曰、在則
人、亡則書、其統一也、」

- (66) 昭明 『尚書』堯典篇「百姓昭明、協和萬邦、」『詩』大雅・既
醉「君子萬年、介爾昭明、」

- (67) 博達 『漢書』陳湯傳「博達善屬文、」『論衡』效力篇「儒生力多者、
博達疏通、」

- (68) 大義 經書の根本義。『漢書』藝文志「仲尼沒而微言絕、七十子
喪而大義乖、」なお序注(26)参照。

- (69) 物名 猶お名物と言うがごとし。煩瑣な事物の名数の考證を謂う。
器械 『周禮』天官・司書「知民之財、器械之數、」

- (70) 摘其章句云云 當時の章句訓詁の學の弊については、『後漢書』儒林
傳序にも「章句漸疏、多以浮華相尚、儒者之風蓋衰」とある。

- (71) 女史 『漢書』外戚傳下「陳女圖以鏡監令、顧女史而問詩、」

法象第二

夫法象立。所以爲君子。法象者。莫先乎正容貌慎威儀。是故先王之制禮也。爲冕服采章以旌之。爲珮玉鳴璫以聲之。欲其尊也。欲其莊也。焉可懈慢也。夫容貌者。人之符表也。符表正。故情性治。情性治。故仁義存。仁義存。故盛德著。盛德著。故可以爲法象。斯謂之君子矣。君子者。無尺土之封而萬民尊之。無刑罰之威而萬民畏之。無羽籥之樂而萬民樂之。無爵祿之賞而萬民懷之。其所以致之者一也。故孔子曰。君子威而不猛。泰而不驕。詩云。敬爾威儀。惟民之則。若夫墮其威儀。恍其瞻視。忽其辭令。而望民之則我者。未之有也。莫之則者。則慢之者至矣。小人見慢也。而致怨乎人。患己之卑。而不知其所。以然。哀哉。故書曰。惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖。人性之所簡也。存乎幽微。人情之所忽也。存乎孤獨。夫幽微者顯之原也。孤獨者見之端也。胡可簡也。胡可忽也。是故君子敬孤獨而慎幽微。雖在隱蔽。鬼神不得見其隙也。詩云。肅肅兔置。施於中林。處獨之謂也。又有顛沛而不可亂者。則成王季路其人也。昔者成王將崩。體被冕服。然後發顧命之辭。季路遭亂。結纓而後死白刃之難。夫以彌留之困。白刃之難。猶不忘敬。況於遊宴乎。故詩曰。就其深矣。方之舟之。就其淺矣。泳之游之。言必濟也。君子口無戲謔之言。言必有防。身無戲謔之行。行必有檢。故雖妻妾不可得而黷也。雖朋友不可得而狎也。是以不愠怒而德行行於閨門。不諛諂而風聲化乎鄉黨。傳稱大人正己而物自正者。蓋此之謂也。以匹夫之居猶然。況得意而行於天下者乎。唐堯之帝。允恭克讓。而光被四表。成湯不敢怠遑。而奄有九域。文王祗畏而造彼區夏。易曰。觀盥而不薦。有孚顒若。言下觀而化也。禍敗之由也。則有媒慢以爲階。可無慎乎。昔宋敏碎首於某局。陳靈被禍於戲言。閭邴造逆於相詬。子公生弑於嘗鼃。是故君子居身也謙。在敵也讓。臨下也莊。奉上也敬。四者備而怨咎不作。福祿從之。詩云。靖恭爾位。正直是與。神之聽之。式穀以汝。故君子之交人也。歡而不媿。和而不同。好而不佞詐。學而不虛行。易親而難媚。多恕而寡非。故無絕交無畔朋。書曰。慎始而敬終。終不以困。夫禮也者。人之急也。可終身蹈。而不可須臾離也。須臾離。則悖慢之行臻焉。須臾忘。則悖慢之心生焉。況無禮而可以終始乎。夫禮也者。敬之經也。敬也者。禮之情也。無敬無以行禮。無禮無以

節敬。道不偏廢。相須而行。是故能盡敬以從禮者。謂之成人。過則生亂。亂則災及其身。昔惠公以慢^(三十一)瑞而無嗣。文公以肅命而興國。卻犇以傲享徵亡。冀缺以敬妻受服。子圍以大明昭亂。遠罷以既醉保祿。良霄以鶉奔喪家。子展以草蟲昌族。君子感凶德之如彼。見吉德之如此。故立必磐折。坐必抱鼓。周旋中規。折旋中矩。視不離乎結綬之間。言不越乎表著之位。聲氣可範。精神可愛。俯仰可宗。揖讓可貴。述作有方。動靜有常。帥禮不荒。故爲萬夫之望也。

校記

- (一) 「爾」今本毛詩作「慎」、梁氏云、「原詩另章有敬爾威儀句、惟下句則爲無不柔嘉、當非偉長所引也、」陳喬樞魯詩遺說考云、「徐幹引詩作敬爾、當緣下文敬爾句致誤、」
- (二) 群書治要卷四六(天明七年尾張藩刊本)引「恍」作「慌」、「忽」作「輕」、
- (三) 宮內廳書陵部藏鈔本群書治要、「則我」二字倒、
- (四) 治要「則」作「必」、
- (五) 「見」原文作「皆」、治要作見、錢本據治要改、按錢校是也、今從而改、
- (六) 治要「知」作「思」、
- (七) 治要「蔽」作「翳」、梁氏云、「義同、」
- (八) 「彌留」何本·王本·錢本·子書本·百子本作「崩亡」、杜本·程本二字空格、按何本以意補二字、應無明據、他本從之非是、
- (九) 治要無「故」字、句上複言言必有防、行必有檢二句、鈔本治要無「可」字、下句同、
- (十) 治要「德」作「教」、無一行字、梁氏云、「德行與風聲文例一律、治要非、」
- (十一) 治要無「自」字、按孟子亦無、梁氏云、「治要是、」按無者似是、然有亦不害文義、今姑依舊、
- (十二) 治要以上有「徒」字、錢本據治要補、
- (十三) 治要「意」作「志」、無「者」字、
- (十四) 「堯」原文作「虞」、胡本同、他本皆作堯、按下文皆堯事、不關虞舜、今據諸本改、治要作「唐帝」、句上有「故」字、

(五) 治要「奄」作「掩」、鈔本「而掩」二字倒、

(六) 治要句末有「也」字、

(七) 今本毛詩「恭」作「共」、「汝」作「女」、按漢書淮陽王欽傳引此詩作恭、王先謙詩三家義集疏云、「魯共一作恭、」

(八) 「怨」原文作「恕」、諸本同、唯胡本作恕、梁氏云、「兩京本是也、多恕、故能寡非、作怨形誤、」按梁說是也、今據胡本改、

(九) 原文無「終」字、札記云、「按逸周書常訓解、慎微以始而敬終、乃不困、春秋襄廿五年左氏傳引作慎始而敬終、終以不困、今僞古文尙書蔡仲之命作慎厥初、惟厥終、終以不困、」俞云、「終下當更有終字、左傳、衛太叔文子引書曰、慎始而敬終、終以不困、是其證也、僞古文尙書襲其語……亦有兩終字、」按二說是也、今從而補、

(三) 「瑞」原文作「端」、俞云、「端乃瑞字之誤、僖十一年左傳、天王使召武公・內史過賜晉侯命、受玉惰、過歸、告王曰、晉侯其無後乎、王賜之命、而惰於受瑞、先自棄也已、其何繼之有、慢瑞、即謂惰於受瑞也、」按俞說是也、今從而改、

(三二) 「圍」原文作「圉」、孫詒讓札迻云、「案圍當作圉、左傳昭元年載楚公子圉享趙孟賦大明之首章、叔向知其不終、即其事也、」按孫說是也、今從而改、

法象第二

夫れ法象^①立つは、君子と為る所以なり。法象は容貌^②を正し威儀^③を慎むより先なるは莫し。是の故に先王^④の礼を制するや、冕服采章^⑤を為りて以て之を旌^⑥し、珮玉鳴璜^⑦を為りて以て之を声にす。其の尊きを欲するなり、其の莊なるを欲するなり。焉んぞ懈怠^⑧すべけんや。夫れ容貌は人の符表なり。符表正し、故に情性治まる。情性治まる、故に仁義存す。仁義存す、故に盛徳著る。盛徳著る、故に以て法象^⑨を為すべし。斯れ之を君子と謂ふ。君子なる者は、尺土^⑩の封無くして万民之を尊び、形罰の威無くして万民之を畏れ、羽籥^⑪の樂無くして万民之を樂しみ、爵祿の賞無くして万民之に懷く。其の之を致す所以の者は一なり。故に孔子曰く、「君子威ありて猛からず、泰にして驕らず」と。詩に云ふ、「爾^⑫の威儀を敬め、惟れ民の則^⑬」と。若し夫れ其の威儀を墮とし、其の瞻視^⑭を恍にし、其の辞令^⑮を忽せにして而も民の我に則らんことを望む者は、未だ之有らざ

るなり。之に則る者莫ければ、則ち之を慢る者至る。小人慢られて怨みを人に致す。己の卑しきを患ふも、其の然る所以を知らず。哀しいかな。故に書に曰く、「惟れ聖、念ふこと罔くんば狂と作り、惟れ狂、克く念へば聖と作る」と。人性の簡に^{(17) おろそか}する所や幽微に存し、人情の忽せにする所や孤独に存す。夫れ幽微は頭の原なり。孤独は見る^{(18) あら}るの端なり。胡ぞ簡にすべけんや、胡ぞ忽せにすべけんや。是の故に君子は孤独を敬みて幽微を慎み、隱蔽に在りと雖も、鬼神も其の隙を見るを得ざるなり。詩に云ふ、「肅肅たる兎置、中林に施^{(19) の}ぶ」と。独に処るの謂なり。又た顛沛にも乱るべからざる者有り、則ち成王・季路其の人なり。昔者成王^{(20) わかし}將に崩ぜんとするに、体^{(21) へ} 冕服を被^{(22) き}、然る後に顧命の辞を發す。季路乱に遭ひ、纓を結びて然る後に白刃の難に死せり。夫れ弥留の困、白刃の難を以てしてすら、猶ほ敬を忘れず。況んや遊宴に於てをや。故に詩に曰く「其の深きに就けば、之を方^{(23) なら}べ之を舟にし、其の浅きに就けば、之に泳ぎ之に遊ぶ」と。必ず濟るを言ふなり。君子は口に戲謔の言無く、言へば必ず防ぐこと有り。身に戲謔の行無く、行へば必ず檢すること有り。故に妻妾と雖も、得て黷^{(24) けが}すべからざるなり。朋友と雖も、得て狎^{(25) けが}るるべからざるなり。是を以て愠怒せずして德行閨門に行はれ、諫諭せずして風声郷党を化する。伝に「大人己を正して物自ら正し」と称する者は、蓋し此の謂なり。匹夫の居るを以てしてすら猶ほ然り。況んや意を得て天下に行ふ者をや。唐堯の帝、允^{(26) まこと}に恭にして克く譲り、四表に光被す。成湯敢へて怠遑せずして九域を奄有す。文王祗^{(27) つ}み畏れて彼の区夏を造れり。易に曰く、「觀は盥して薦せず。孚^{(28) まこと}有りて顛若たり」と。言ふところは下觀て化すとなり。禍敗の由るや、則ち媿慢有りて以て階を為す。慎むこと無かるべけんや。昔 宋敏 首を棋局に碎かれ、陳靈 禍を戲言に被り、閭邴^{(29) へ} 逆を相詬^{(30) そし}るに造し、子公 弑を鼃を嘗むるに生ぜり。是の故に君子 身を居くや謙に、敵に在るや讓に、下に臨むや莊に、上を奉ずるや敬なり。四者備はりて怨咎^{(31) おと}作らず、福祿之に従ふ。詩に云ふ、「爾の位を靖恭し、正直是れ与す。神の之を聴かば、穀^{(32) ろく}を式^{(33) もつ}て汝に以^{(34) あた}へん」と。故に君子の人に交はるや、歡びて媿れず、和して同ぜず、好みて佞詐せず、学びて虚行せず。親しみ易くして媚び難く、恕多くして非寡なし。故に絶交^{(35) ぜつ}無く畔朋無し。書に曰く、「始めを慎みて終りを敬

めば、終に以て困まず」と。夫れ礼なる者は、人の急なり。終身蹈むべくして須臾も離るべからざるなり。須臾離るれば、則ち怙慢の行臻る。須臾忘るれば、則ち怙慢の心生ず。況んや礼無くして以て終始すべけんや。夫れ礼なる者は敬の経なり。敬なる者は礼の情なり。敬無くんば以て礼を行ふ無く、礼無くんば以て敬を節する無し。道偏廢せず、相須ちて行はる。是の故に能く敬を尽くし以て礼に従ふ者、之を成人と謂ふ。過ぐれば則ち乱を生じ、乱るれば則ち災其の身に及ぶ。昔恵公⁶³ 瑞を慢るを以て嗣無く、文公⁶⁴ 命を肅むを以て国を興し、卻犇⁶⁵ 享に傲るを以て亡を徴し、冀欠⁶⁶ 妻を敬するを以て服を受け、子圉⁶⁷ 大明を以て乱を昭らかにし、遠罷⁶⁸ 既醉を以て禄を保ち、良霄⁶⁹ 鶉奔を以て家を喪ひ、子展 草虫を以て族を昌へしめき。君子凶徳の彼の如きに感じ、吉徳の此くの如きを見る。故に立てば必ず磬折し、坐すれば必ず鼓を抱くがごとくす。周旋規に中り、折旋矩に中り、視⁷² 結綯の間を離れず、言⁷³ 表著の位を越えず。声氣範とすべく、精神愛すべく、俯仰宗とすべく、揖讓貴ぶべし。述作方有り、動靜常有り、礼に帥⁷⁴ひて荒せず。故に万夫の望みと為るなり。

注

- (1) 法象 法るべき形象の意。用例としては後世の偽作だが、『孔子家語』入官篇に「凡法象在内、故法不遠而源泉不竭」と見える。
- (2) 正容貌 『禮記』曲禮上篇「正爾容、聽必恭、」 『論語』泰伯篇「動容貌、斯遠暴慢矣、」
- (3) 慎威儀 『儀禮』士冠禮「敬爾威儀、淑慎爾徳、」 『國語』周語中「容貌有崇、威儀有則、」
- (4) 先王之制禮也 『荀子』禮論篇「先王惡其亂也、故制禮義以分之、」 『禮記』明堂位篇「周公踐天子之位、以治天下、……制禮作樂、」 『左傳』哀公七年「周之王也制禮、」
- (5) 冕服采章 『周禮』春官・司服注「此古天下冕服十二章、……至周……冕服九章、……九章、一曰龍、次二曰山、次三曰華蟲、次四曰火、次五曰宗彝、皆畫以爲績、次六曰藻、次七曰粉米、次八曰黼、次九曰
- (6) 獻、皆希以爲繡、」 『左傳』宣公十四年「於是有容貌采章嘉淑、」 珮玉鳴璫 珮は佩に同じ。『禮記』玉藻篇「古之君子必佩玉、……行則鳴珮玉、」
- (7) 懈慢 『後漢書』楊秉傳「鄧通懈慢、申徒嘉召通詰責、」 盛德著 『史記』老子傳に「良賈深藏若虛、君子盛徳、容貌若愚」(又見於『大戴禮』曾子制言上篇)とあるが、徐氏のこの論は、恐らくかかる道家的思想に意識的に反撥したものであるう。
- (8) 尺土之封 『史記』李斯傳「使秦無尺土之封、不立弟子爲王、功臣爲諸侯者、」 李陵「答蘇武書」「無尺土之封。加子之勳、」 『文選』卷四一
- (9) 羽籥 『周禮』春官・籥師「掌教國師舞羽籥、祭祀則鼓羽籥之舞、」 注「文舞有持羽吹籥、所謂籥舞也、文王世子曰、秋冬學羽籥、詩云、左手執籥、右手秉翟、」
- (10) 懷之 『論語』雍也篇「老者安之、朋友信之、少者懷之、」

- (12) 孔子曰云云 『論語』堯曰篇の文。なお「威而不猛」は述而篇に、「泰而不驕」は子路篇にそれぞれ見えている。
- (13) 詩云云 大雅・抑の文。『漢書』匡衡傳に「舉錯動作、物遵其儀、故形爲仁義、動爲法則、孔子曰、德義可尊、容止可觀、進退可度、以臨其下、是以其民畏而愛之、則而象之、大雅云、敬慎威儀、惟民之則」とあるのも同様の解釋。
- (14) 瞻視 『論語』堯曰篇「君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、斯不亦威而不猛乎、」
- (15) 辭令 『禮記』冠義篇「禮義之始、在於正容體、齊顏色、順辭令、」書曰云云 周書・多方篇の文。
- (16) 所簡 『呂氏春秋』處方篇注「簡、情也、」
- (17) 幽微 『後漢書』崔駰傳「窮至顯幽微、測潛隱之無限、」
- (18) 孤獨 『荀子』君道篇「孤獨而晦、謂之危、」
- (19) 君子敬孤獨而慎幽微 『禮記』中庸篇「莫見於隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也、」
- (20) 鬼神 同右「君子之道、……質諸鬼神而無疑、」
- (21) 見其隙 『漢書』劉向傳「群小窺見間隙、緣飾文字、」
- (22) 詩云云 周南・兔置篇の文。王先謙はこの解釋を三家詩に基づくものだとし、「中林林中、劉良（桓溫「薦譙元彥表」）注所謂退處山林也、徐以中林爲隱蔽、與關雎篇薛君言河洲隱蔽無人之處（『後漢書』馮衍傳注）、張衡（『思立賦』）以爲河林、其義正合、蓋天顯處、出林幽獨之處、仍不改其肅敬之容」と云う。又云う、「列女傳楚狂接輿傳云、夫安貧賤而不怠道者、惟至德能之、詩曰、肅肅兔置、椽之丁丁、言不怠道也、兔置之容、不失其恭者、易林坤之困文、據此、魯齊韓釋肅肅義同、」
- (23) 顛沛 『論語』里仁篇「君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是、」
- (24) 成王將崩 『尚書』周書・顧命篇序「成王將崩、命召公畢公、率諸侯相康王、作顧命、」
- (25) 體被冕服 同右本文「王不懌、甲子、王乃洮頰水、相被冕服、憑玉几、」
- (26) 季路遭亂云云 『左傳』哀公十五年「子路入、及門、公孫敢門焉、曰、無入爲也、季子曰、是公孫也、求利焉、而逃其難、由不然、利其祿、必救其患、……大子聞之、懼、下石乞・孟黶蔽子路、以戈擊之、斷纓、子路曰、君子死、冠不、結纓而死、」事また『史記』仲尼弟子傳に見ゆ。
- (27) 彌留之困 『尚書』顧命篇「嗚乎、疾大漸、惟幾、病曰臻、既彌留、」
- (28) 白刃之難 『禮記』中庸篇「白刃可蹈也、」
- (29) 遊宴 『漢書』匡衡傳「聖人動靜游燕、所親物得其序、」
- (30) 詩曰云云 邶風・谷風の文。王先謙は魯詩説であろうという。
- (31) 戲謔 『詩』衛風・淇澳「善戲謔矣、不爲虐令、」『後漢書』皇甫規傳「畜貨聚馬戲謔、」
- (32) 不可得而狎也 『尚書』周書・旅獒篇「德盛不狎侮、」
- (33) 闔門 『禮記』仲尼燕居篇「以之闔門之中有禮、故三族和也、」同坊記篇「言孝不言慈、闔門之內、戲而不欺、」
- (34) 風聲 『尚書』周書・畢命篇「彰善癉惡、樹之風聲、」『左傳』文公六年「古之王者、知命之不长、是以並建聖哲、樹之風聲、」
- (35) 傳稱云云 『孟子』盡心上篇「有大人者、正己而物正者也、」なお中庸にも「正己」という語が見える。
- (36) 允恭克讓云云 『尚書』虞書・堯典篇「曰若稽古帝堯、……欽明文思、安安、允恭克讓、光被四表、格于上下、」
- (37) 成湯不敢怠遑 『詩』商頌・殷武「不懌不濫、不敢怠遑、」
- (38) 奄有九域 『詩』商頌・玄鳥「古帝命武湯、正域彼四方、方命厥后、奄有九有、」鄭箋「天帝命有威武之德者成湯、使之長有邦域、爲政於天下、……湯有是德、故覆有九州、爲之王也、」王先謙云う、「三家今文作域也、域有一聲之轉、」
- (39) 文王祗畏云云 『尚書』周書・康誥篇「惟乃不顯考文王、克明德慎」

罰、不敢悔繆寡、庸庸祗祗、威威顯民、用肇造我區夏。」皮錫瑞云
う、「今文威作畏、」なお「祗畏」の語は金縢篇などにも見えてい
る。

(41) 易曰云云 觀卦卦辭。「下觀而化」は象傳の文。

(42) 禍敗 『漢書』敘傳「灌夫矜勇、武安驕盈、凶德相挺、駸敗用成、」
有媒慢以爲階 『詩』小雅・賓之初筵傳「怱怱、媒、媒也、」陳奐

(43) 『詩』毛氏傳疏「新書道術篇、接遇愼容、謂之恭、反恭爲媒、接遇肅
正、謂之敬、反敬爲慢、」『漢書』谷永傳「亂服共坐、流湍媒慢、」
『左傳』隱公三年「若猶未也、階之爲禍、」

(44) 宋敏碎首於棊局 『公羊傳』莊公十二年「秋八月甲午、宋萬弑其君
接、……萬嘗與莊公戰、獲乎莊公、……數月然後歸之、歸反爲大夫於

宋、與閔公博、婦人皆在側、萬曰、甚矣魯侯之淑、魯侯之美也、天下
諸侯、宜爲君者、唯魯侯爾、閔公矜此婦人、妬其言、顧曰、此虜也、
爾虜焉故、魯侯之美惡乎至、萬怒、搏閔公、絕其脰、」『史記』宋世
家「湣公與南宮萬獵、因博爭行、湣公怒辱之、……萬病此言、遂以局
殺湣公於蒙澤、」

(45) 陳靈被禍於戲言 『左傳』宣公十年「陳靈公與孔寧・儀行父、飲酒
於夏氏、公謂行父曰、微舒似汝、對曰、亦似君、微舒病之、公出、自

其廐射而殺之、」杜注「蓋以夏姬淫放、故謂其子多似、以爲戲也、」
閔邴造逆於相詬 『左傳』文公十八年「齊懿公之爲公子也、與邴歜

之父爭田、弗勝、乃即位、乃掘而刖之、而使歜僕、納閔職之妻、而使
職駟乘、夏五月、公游于申地、二人浴于池、歜以扑扶職、職怒、歜曰、
人奪汝妻而不怒、一扶汝、庸何傷、職曰、與刖其父而弗能病者何如、
乃謀弑懿公、納諸竹中、」また『國語』楚語に見ゆ。

(47) 子公生弑於嘗餼 『左傳』宣公四年「楚人獻餼於鄭靈公、公子宋與
子家將見、子公之食指動、以示子家曰、他日我如此、必嘗異味、及入、
宰夫將解餼、相視而笑、子家以告、及食大夫餼、召子公而弗與也、子
公怒、染指於鼎、嘗之而出、公怒、欲殺子公、子公與子家謀先、子家
曰、畜老猶憚殺之、而況君乎、反譖子家、子家懼而從之、夏、弑靈

公、」また『史記』鄭世家、「說苑」復恩篇に見ゆ。

(48) 居身 『後漢書』黃瓊傳「不夷不惠可否之間、蓋聖賢居身之所珍
也、」

(49) 在敵也讓 『國語』周語中「在禮、敵必三讓、」韋注「敵、體敵
也、」

(50) 怨咎 『左傳』昭公八年「小人之言、僭而無徵、故怨咎及之、」
福祿從之 『詩』小雅・瞻彼洛矣「君子至止、福祿如茨、」『淮南

(51) 子人間訓「君子致其道、而福祿歸矣、」
詩云云 小雅・小明的文。なお『禮記』表記篇にもこの詩を引き

(52) (亦た恭に作る)、その鄭注に「言敬治女位之職、正直之人、乃與爲
倫友、神聽女之所爲、用祿與女」とある。これは恐らく韓詩說(もし

(53) 和而不同 『論語』子路篇「君子和而不同、小人同而不和、」
無絶交無畔友 『說苑』正諫篇「故無亡國破家、悖父亂子、放兄棄

(54) 弟、狂夫淫婦、絶交敗友、」
書曰云云 校記(十九)參照。

(55) 禮也者人之急也 『左傳』昭公三年「君子曰、禮、其人之急也乎、
伯石之汰也、一爲禮於晉、猶荷其祿、況以禮終始乎、詩曰、人而無禮、

(56) 胡不遇死、其是之謂乎、」
不可須臾離也 『禮記』中庸篇「道也者、不可須臾離也、可離非道

(57) 也、」同樂記篇「禮樂不可斯須去身、」
須臾離云云 同右「致禮以治躬、則莊敬、莊敬則嚴威、心中斯須不

(58) 和不樂、而鄙詐之心入之矣、外貌斯須不莊不敬、而易慢之心入之矣、」
況無禮而可以終始乎 注(56)參照。

(59) 敬也者禮之情也 『左傳』僖公十一年「禮、國之幹也、敬、禮之興
也、不敬則禮不行、禮不行、則上下昏、」

(60) 成人 『論語』憲問篇「若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、
冉求之藝、文之以禮樂、亦可以爲成人矣、」

(61) 災及其身 『禮記』表記篇「口惠而實不至、怨蓄及其身、」

(62)

(63) 惠公以慢瑞而無嗣 校記(二十)参照。『漢書』五行志中之上にも載す。

(64) 文公以肅命而興國 『左傳』僖公二十八年「王命尹氏及王子虎・內史叔興父・策命晉侯、賜之大路之服……曰、王謂叔父、敬服王命、以綏四國、晉侯三辭從命、曰、重耳敢再拜稽首、奉揚天子之不顯休命、受策以出、出入三覲、」

(65) 卻曄以傲享徵亡 『左傳』成公十四年「衛侯饗苦成叔、寧惠子相、苦成叔傲、寧子曰、苦成叔家、其亡乎、古之爲享、食也、以觀威儀、省禍福也、……今夫子傲、取禍之道也、」

(66) 冀缺以敬妻受服 『左傳』僖公三十三年「初臼季使過冀、見冀缺耨、其妻饁之、敬相待如賓、與之歸、言諸文公、曰、敬、德之聚也、能敬必有德、德以治民、君請用之、」 事また『國語』晉語五にも見ゆ。

(67) 子圉以大明昭亂 『左傳』昭公元年「令尹(子圉)享趙孟、賦大明之首章、趙孟賦小宛之二章、事畢、趙孟謂叔向曰、令尹自以爲王矣、何如、對曰、王弱令尹彊、其可哉、雖可不終、趙孟曰、何故、對曰、彊以克弱而安之、彊不義也、不義而彊、其斃必速、」 なお原文は子圉に作るが、それだと僖公二十三年の「懷公(子圉)執狐突、……乃殺之、卜偃稱疾不出、曰、周書有之、乃大明服、己則不明、而殺人以逞、不亦難乎、民不見德、而唯戮是聞、其何後之有」を指すとみる他ないが、どうもびつたりしないし、また下から考えて「大明」は詩名でなければならぬから、改めるのが妥當であらう。梁氏も同意見である。

(68) 遽罷以既醉保祿 『左傳』襄公二十七年「楚遽罷如晉涖盟、晉侯享之、將出賦既醉、叔向曰、遽氏之有後於楚、宜哉、承君命不忘敏、子蕩將知政矣、」 なお「保祿」は『孝經』士人章に「保其爵祿」とある。良霄以鶉奔喪家云云 『左傳』襄公二十七年「晉荀盈遂如楚涖盟、鄭伯享趙孟于垂隴、子展・伯有・子西・子產・子大叔・二子石從、趙孟曰、七子從君以寵武也、請皆賦以卒君之貺、武亦觀七子之志、子展賦草蟲、趙孟曰、善哉、民之主也、抑武也不足以當之、伯有賦鶉之賁

賁、趙孟曰、牀第之言不踰闕、況在野乎、非使人之所得聞也、……文子告叔向曰、伯有將爲戮矣、詩以言志、志趣其上、而公怨之、以爲賓榮、其能久乎、幸而後亡、……子展、其後亡者也、在上不忘降、」 今本毛詩、賁賁を奔奔に作る。王先謙に據れば、魯詩は賁賁に作るというから、徐氏或いは毛詩に取る有るか。

(70) 吉德 『左傳』文公十八年「孝敬忠信爲吉德、盜賊藏姦爲凶德、」立必磬折、坐必抱鼓 『禮記』曲禮下篇「立。則磬折垂佩、」注「磬折、謂身微僂如磬之曲折也、」 『說苑』修文篇「書曰五事、一曰貌、貌者男子之所恭敬、婦人之所以姣好也、行步中矩、立則磬折、拱則抱鼓、」

(72) 周旋中矩、折旋中矩 『禮記』玉藻篇「周。還。中。規。折。還。中。矩、」同仲尼燕居篇「行。中。規。環。中。矩、」 『尚書大傳』「天子將出、則撞黃鐘、右五鐘右應、……步者中規、折還中矩、立則磬折、拱則抱鼓、然後太師奏、登車告出也、」 『韓詩外傳』卷一にはば同文が見える。なお「周旋」は「孟子」盡心下篇に「動容周旋中禮者、盛德之至也」とあるをはじめとして用例多く、「折旋」も『說苑』辨物篇に「行步中規、折旋中矩」などがある。

(73) 視不離乎結綯之間云云 『左傳』昭公十一年「單子會韓宣子于戚、視下言徐、叔向曰、單子其將死乎、朝有著定、會有表、衣有綯、帶有結、會朝之言、必聞表著之位、所以昭事序也、視不過結綯之中、所以道容貌也、」

(74) 聲氣可範 『左傳』襄公三十一年「君子、在位可畏、施舍可愛、進退可度、周旋可則、容止可觀、作事可法、德行可象、聲氣可樂、動作有文、言語有章、以臨其下、有威儀也、」 『新書』容經篇にほぼ同文が見える。

(75) 動靜有常 『周易』繫辭上傳「動。靜。有。常。剛。柔。斷。矣、」 『禮記』樂記篇「動。靜。有。常。小。大。殊。矣、」 萬夫之望 『周易』繫辭下傳「君子知微知彰、知柔知剛、萬夫之望、」

(69) 鄭伯享趙孟于垂隴、子展・伯有・子西・子產・子大叔・二子石從、趙孟曰、七子從君以寵武也、請皆賦以卒君之貺、武亦觀七子之志、子展賦草蟲、趙孟曰、善哉、民之主也、抑武也不足以當之、伯有賦鶉之賁

脩本第三

人心莫不有理道。^(二)至乎用之則異矣。或用乎己。或用乎人。^(三)謂之務本。用乎人者。謂之追末。^(四)君子之理也。先務其本。故德建而怨寡。^(補)小人之理也。先追其末。故功廢而讐多。孔子之制春秋也。詳內而略外。急己而寬人。故於魯也。小惡必書。於衆國也。大惡始筆。夫見人而不自見者謂之矇。聞人而不自聞者謂之聵。慮人而不自慮者謂之瞽。故明莫大乎自見。聰莫大乎自聞。睿莫大乎自慮。此三者。舉之甚輕。行之甚邇。而人莫之知也。故知者舉甚輕之事以任天下之重。行甚邇之路以窮天下之遠。故德彌高而基彌固。勝彌衆而愛彌廣。^(七)易曰。復亨。出入無疾。朋來無咎。其斯之謂歟。君子之於己也。無事而不懼焉。我之有善。懼人之未吾好也。我之有不善。懼人之未吾惡也。見人之善。懼我之不能脩也。見人之不善。懼我之必若彼也。故其嚮道。止則隅坐。行則駟乘。上懸乎冠綬。下繫乎帶珮。晝也與之遊。夜也與之息。此盤銘之謂日新。^(十一)易曰。日新之謂盛德。孔子曰。弟子勉之。汝毋自舍。人猶舍汝。況自舍乎。人違汝其遠矣。故君子不恤年之將衰。^(十二)而憂志之有倦。不寢道焉。不宿義焉。^(十四)言而不行。斯寢道矣。行而不時。斯宿義矣。夫行異乎言。言之錯也。無周於智。^(十五)言異乎行。行之錯也。有傷於仁。是故君子務以行前言也。人之過在於哀死。^(十六)而不在於愛生。在於悔往。而不在於懷來。喜語乎已然。^(十七)好爭乎遂事。^(十八)墮於今日。而懈於後旬。^(十九)如斯以及於老。故野人之事。不勝其悔。君子之悔。不勝其事。孔子謂子張曰。師。吾欲聞彼。將以改此也。聞彼而不改此。^(二十一)雖聞何益。故書舉穆公之誓。善變也。春秋書衛北宮括伐秦。善攝也。夫珠之含礫。瑾之挾瑕。斯其性與。良工爲之。以純其性。^(二十二)若夫素然。故觀二物之既純。而知仁德之可粹也。優者取多焉。劣者取少焉。在人而已。孰禁我哉。乘扁舟而濟者。其身也安。粹大道而動者。其業也美。故詩曰。追琢其章。金玉其相。勉勉我王。綱紀四方。先民有言。明出乎幽。著生乎微。故宋井之霜。以基昇正之寒。黃蘆之萌。以兆大中之暑。事亦如之。故君子脩德。始乎筭鼎。終乎鮒背。創乎夷原。成乎喬嶽。易曰。升元亨。用見大人。勿恤。南征吉。積小致大之謂也。小人朝爲而夕求其成。坐施而立望其反。行一日之善。^(二十五)而求終身之譽。譽不至則曰。善無益矣。遂疑聖人之言。背先王之教。存其舊術。順其常好。是以身辱名賤。而不免

爲人役也。孔子曰。小人何以壽爲。一日之不能善矣久。惡惡之甚也。蓋人有惑而不能自知者。舍有而思無也。舍易而求難也。身之與家。我之有也。治之誠易。而不肯爲也。人之與國。我所無也。治之誠難。而願之也。雖曰吾有術。誰信之與。^(二十七)故懷疾者。人不使爲醫。行穢者。人不使畫法。以無驗也。子思曰。能勝其心。於勝人乎何有。不能勝其心。如勝人何。故一尺之錦。足以見其巧。一仞之身。足以見其治。是以君子慎其寡也。道之於人也。甚簡且易耳。^(二十八)其脩之也。非若採金攻玉之涉歷艱難也。^(二十九)非若求盈司利之競逐囂煩也。不要而遵。不徵而盛。四時嘿而成。^(三十)不言而信。德配乎天地。功侔乎四時。名參乎日月。此虞舜大禹之所以由匹夫登帝位。解布衣被文采者也。故古語曰。至德之貴。何往不遂。至德之榮。何往不成。後之君子。雖不及行。亦將至之云耳。琴瑟鳴不爲。無聽而失其調。仁義行不爲。無人而滅其道。故絃絕而宮商亡。身死而仁義廢。曾子曰。士任重而道遠。^(三十一)仁以爲己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。夫路不險。則無以知馬之良。任不重。則無以知人之德。^(三十二)君子自強其所重以取福。^(三十三)小人曰安其所輕以取禍。或曰。斯道豈信哉。曰。何爲其不信也。世之治也。行善者獲福。爲惡者得禍。及其亂也。行善者不獲福。爲惡者不得禍。變數也。知者不以變數疑常道。故循福之所自來。防禍之所由至也。遇不遇。非我也。其時也。夫施吉報凶謂之命。施凶報吉謂之幸。守其所志而已矣。易曰。君子以致命遂志。^(三十四)然行善而獲福猶多。爲惡不得禍猶少。總夫二者。豈可舍多而從少也。曾子曰。人而好善。福雖未至。禍其遠矣。人而不好善。禍雖未至。福其遠矣。故詩曰。習習谷風。惟山崔巍。何木不死。何草不萎。^(三十五)言盛陽布德之月。草木猶有枯落而與時謬者。況人事之應報乎。故以歲之有凶穰而荒其稼穡者。非良農也。以利之有盈縮而棄其資貨者。非良賈也。以行之有禍福而改其善道者。非良士也。詩云。顓顓卬卬。如珪如璋。令聞令望。^(三十六)愷悌君子。四方爲綱。舉珪璋以喻其德。貴不變也。

校記

(一) 治要「人」作「民」、「理」作「治」、錢本據治要改、札記云、「原本民作人、治作理、蓋本唐世避諱字、今治要作民作治、又經後人改

正矣，」按錢校未允，此論人皆生而有知理之心，不必限於民心，蓋後人因知唐人諱民治字，遂以爲人理字都是民治之代字，而改不當改，今依舊、

(二) 治要二句互倒、

(三) 「追」原文作「近」、治要作追、梁氏云、「追、逐也、於義爲長、」按梁說是也、今據治要改、下同、

(四) 治要「理」作「治」、下有「之」字、下小人之理也句同、錢本據治要改補、

(五) 明莫大乎自見三句、三「乎」字、治要並作「於」、

(六) 原文無「人」字、治要有、錢本據治要補、按錢校是也、今從而補、

(七) 德彌高而基彌固二句、治要「德」作「位」、「愛」作「受」(鈔本原作愛、訂而傍記受)、並無兩「而」字、梁氏云、「德愛二字較勝、」按原文·治要兩通、今姑依舊、

(八) 「吾」鈔本治要作「善」、

(九) 鈔本治要無「有」字、

(十) 「未」治要作「必」、錢本據治要改、梁氏云、「尋繹文理、治要非、懼人之必吾惡、則非君子、」按治要非是、若作必、則吾惡二字、非倒爲惡吾不可、

(十一) 疑謂上脫「所」、

(十二) 意林「恤」作「卹」、按說文卹字段注、「卹、與心部恤音義皆同、古書多改爲恤、」

(十三) 意林「衰」作「暮」、

(十四) 原文宿下無「焉言而不行斯寢道矣行而不時斯宿義」十六字、治要有、錢本據治要補、按錢校是也、今從而補、

(十五) 俞云、「周當作害、篆書相似而誤、此謂行異於言則可、言異於行則不可、故一則曰無害乎智、一則有傷於仁、而承之曰君子務以行前言也、卽先行其言之意、」梁氏云、「行異乎言、則言在先、行在後、言異乎行、則行在先、言在後也、下文承之曰是故君子務以行前言也、此乃言行一致之意、俞氏謂行異於言則可、言異於行則不可、於理乖謬、故周作害、非是、周字不誤、周、全也、無周於智、謂於智不周全也、無周有傷、文義相同、」按梁說是也、

(十六) 人之過在於哀死四句、治要作「民之過在於哀死而不愛生、悔往而不愼來、」札記云、「原作人之過在於哀死而不_於哀生……、文義

不屬、蓋妄人綴補、今據治要刪正、」梁氏云、「今各本並作愛生、不作哀生、未知錢氏所據何本、所據誤本、而謂文義不屬、失檢、」按錢氏云原作哀生者、蓋不過誤刻耳、但治要雖較易解、原文亦不得云文義失屬、今姑依舊、

(七) 「喜」治要作「善」、札記云、「似誤、」

(六) 「墮」下治要無「於」字(鈔本有、墮作隋)、

(五) 鈔本治要複「如斯」二字、

(四) 「謂子張」三字、治要作「憚其心」、札記云、「案孔子上、疑有脫文、」

(三) 「改」上治要有以字、鈔本作不以此改、

(二) 俞云、「夫素、疑當作太素、列子天瑞篇曰、太素者質之始也、」按俞說非、此謂珠瑾之純如生帛也、與生成萬物之太素無關、

(一) 「反」治要作「及」、

(二) 鈔本治要「行」作「無」、

(三) 「求」治要作「問」、(鈔本終原作俗、而訂傍記終、又譽誤作學、)

(四) 「不免」二字、治要作「永」、

(五) 諸本(除胡本)術下複「吾有術」三字、「與」作「歟」、

(六) 「甚」字、胡本同、杜本·程本·何本·王本·子書本·百子本作「其」、意林及御覽卷四〇三引作甚、錢本據意林·御覽改作甚、

(七) 意林·御覽、「非」並作「不」、又並無「歷」字、

(八) 俞云、「四時嘿而成句、文義不倫、疑當作不行而成、行誤爲時、涉下文而誤不爲四、乃加嘿字以成義耳、」按俞說似是、然嫌獨斷、今姑依舊、

(九) 「仁」原文作「任」、胡本同、他本皆作仁、今本論語亦作仁、今據諸本改、

(十) 意林「德」作「材」、

(十一) 札記云、「以下小人句推之、自疑當作日、」梁氏云、「錢說是也、」按錢說似是、然以無明據、今姑依舊、

(十二) 原文獲上有「不」字、俞云、「行善句衍不字、蓋謂世之亂也、行善者不獲福、爲惡者不得禍、然究而言之、則行善獲福者猶多、爲惡者不得禍者猶少、故不可舍多而從少也、涉下句而衍不字、義不可通、」按俞說是也、今從而刪、

(十三) 今本毛詩、「惟」作「維」、「鬼」作「巍」、兩「何」字並作「無」、木草互倒、王先謙據此云、「魯維作惟、無皆作何、」又云、「草木字、

蓋轉寫誤倒、

〔三才〕 今本毛詩、「愷悌」作「豈弟」、

〔補〕 鈔本治要「德建」原作「懷遠」、有傍記作德建、

本を脩む第三

人心^② 理道有らざるは莫し。之を用ふるに至りては則ち異なれり。或いは己に用ひ、或いは人に用ふ。己に用ふる者、之を^③本を務むと謂ひ、人に用ふる者、之を末を追ふと謂ふ。君子の理むるや、先づ其の本を務む。故に德建ちて怨み寡なし。小人の理むるや、先づ其の末を追ふ。故に功廢せられて讐多し。孔子の春秋を制するや、内を詳にして外を略し、己を急にして人に寛にせり。故に魯に於けるや、小惡も必ず書し、衆国に於けるや、大惡にして始めて筆す。夫れ人を見て自ら見ざる者、之を矇と謂ひ、人を聞きて自ら聞かざる者、之を聵^{くわい}と謂ひ、人を慮りて自ら慮らざる者、之を瞽^{ぼう}と謂ふ。故に明は自ら見るより大なるは莫く、聰は自ら聞くより大なるは莫く、睿は自ら慮るより大なるは莫し。此の三者は、之を挙ぐることに甚だ軽く、之を行ふこと甚だ邇^{ちか}し。而るに人、之を知るもの莫きなり。故に知者は甚だ軽きの事を挙げて以て天下の重きを任^{にな}ひ、甚だ邇きの路を行ひて以て天下の遠きを窮む。故に德弥いよ高くして基弥いよ固く、勝つこと弥いよ衆くして愛さるること弥いよ広し。易に曰く、「復は享る。出入疾無し。朋来りて咎無し」と。其れ斯の謂か。君子の己に於けるや、事として懼れざるは無し。我に善有らば、人の未だ吾を好まざるを懼るるなり。我に不善有らば、人の未だ吾を惡まざるを懼るるなり。人の善を見ては、我の脩むる能はざるを懼るるなり。人の不善を見ては、我の必ず彼の如きを懼るるなり。故に其の道に嚮^{むか}ふこと、止まれば則ち隅坐し、行けば則ち驂乗し、上は冠綬^⑫を懸け、下は帶珮^⑬を繫^かく。昼や之と遊び、夜や之と息ふ。此れ盤銘^⑭の謂る日新^{いはゆ}なり。易に曰く、「日び新たなるを之れ盛德と謂ふ」と。孔子曰く、「弟子、之を勉めよ。汝自ら舍つる

母かれ。人すら猶ほ汝を舍つ、況んや自ら舍つるをや。人 汝を違ること其れ遠し」と。故に君子 年の將に衰へんとする
 を恤へずして志の倦むこと有るを憂ふ。道を寝まされ、義を宿めされ。言ひて行はざるは、斯れ道を寝むるなり。行ひて時
 ならざるは、斯れ義を宿むるなり。夫れ行 言に異なるは、言の錯ちなり。智に周きこと無し。言 行に異なるは、行の
 錯ちなり。仁を傷ること有り。是の故に君子は務めて以て前言を行ふなり。人の過は死を哀しむに在りて生を愛するに在ら
 ず、往を悔ゆるに在りて来を懷ふに在らず。喜びて已然を語り、好んで遂事を争ひ、今日に墮りて後旬に懈る。斯くの如く
 して以て老に及ぶ。故に野人の事は其の悔に勝へず、君子の悔は其の事に勝へず。孔子 子張に謂ひて曰く、「師よ、吾
 彼に聞かんと欲するは、將に以て此れを改めんとすればなり。彼に聞きて此れを改めずんば、聞くと雖も何ぞ益あらん」
 と。故に書 穆公の誓を挙ぐるは、善く変ずればなり。春秋 衛の北宮括の秦を伐てるを書するは、善く撰ればなり。夫れ
 珠の礫を含み、瑾の瑕を挾むは、斯れ其の性か。良工 之を為めて以て其の性を純にせば、かの素の若く然り。故に二物の
 既に純なるを觀て仁徳の粹にすべきを知るなり。優れる者取ること多く、劣れる者取ること少なし。人に在るのみ、孰か我
 を禁ぜんや。扁舟に乗りて済る者は、其の身や安く、大道に粹して動く者は、其の業や美し。故に詩に曰く、「其の章を追琢
 し、其の相を金玉にす。勉強たる我が王、四方を綱紀す」と。先民言へる有り、「明は幽より出で、著は微より生ず」と。
 故に宋井の霜、以て昇正の寒に基づけ、黄蘆の萌、以て大中の暑を兆す。事も亦たかくの如し。故に君子 徳を脩むるは、
 筭朶に始まりて鮒背に終り、夷原に創まりて喬嶽に成る。易に曰く、「升は元いに享る。用て大人を見る。恤ふる勿かれ。
 南征せば吉」と。小を積みて大を致すの謂なり。小人朝に為して夕べに其の成るを求め、坐して施して立ちて其の反るを望
 み、一日の善を行ひて終身の譽を求む。譽至らざれば則ち曰く、「善 益無し」と。遂に聖人の言を疑ひ、先王の教へに背
 き、其の旧術を存し、其の常好に順ふ。是を以て身辱められ名賤くして、人に役せらるるを免れず。孔子曰く、「小人何ぞ
 寿を以て為さん。一日も善なる能はざること久し」と。惡を惡むの甚しきなり。蓋し人 大いに惑ひて自ら知る能はざる

者有り。有を捨てて無を思ふなり、易を捨てて難を求むるなり。身と家とは我の有なり。之を治むること誠に易きに、為すを肯んぜざるなり。人と国とは我の無き所なり。之を治むること誠に難きに、之を願ふなり。吾に術有りと曰ふと雖も、誰か之を信ぜんや。故に疾を懷く者は、人 医を為さしめず、行穢き者は人 法を画かしめず。驗無きを以てなり。子思⁽⁴⁶⁾の曰く、「能く其の心に勝たば、人に勝つに於てか何か有らん。其の心に勝つ能はずんば、人に勝つを如何せん」と。故に一尺の錦も以て其の巧を見るに足り、一切⁽⁴⁷⁾の身も以て其の治を見るに足る。是を以て君子 其⁽⁴⁸⁾の寡なきを慎むなり。道の人に於けるや、甚だ簡にして且つ易なり。其の之を脩むるや、金を採り玉を攻むるの艱難を涉歴⁽⁴⁹⁾するが若きに非ざるなり。盈るを求め利を司るの囂煩を競ひ逐ふが若きに非ざるなり。要めずして遘⁽⁵⁰⁾ひ、徴せずして盛んに、四時⁽⁵¹⁾の黙して成るがごとく、言はずして信あり。徳⁽⁵²⁾ 天地に配し、功 四時に侔⁽⁵³⁾しく、名 日月に参⁽⁵⁴⁾ぶ。此れ虞舜⁽⁵⁵⁾・大禹⁽⁵⁶⁾の匹夫より帝位に登り、布衣を解き文采を被⁽⁵⁷⁾る所以の者なり。故に古語に曰く、「至徳の貴き、何⁽⁵⁸⁾くに往きて遂げざらん。至徳の榮、何⁽⁵⁹⁾くに往きて成らざらん」と。後の君子、行ふに及ばずと雖も、亦た將に之に至らんとするのみ。琴瑟の鳴為されざれば、聴くこと無くして其の調べを失ひ、仁義の行為されざれば、人無くして其の道を滅す。故に弦絶えて宮商亡び、身死して仁義廢せらる。曾子⁽⁶⁰⁾曰く、「士 任重くして道遠し。仁以て己が任と為す、亦た重からずや。死して後已む、亦た遠からずや」と。夫れ路 險ならざれば則ち以て馬の良きを知る無く、任重⁽⁶¹⁾からざれば則ち以て人の徳を知る無し。君子自ら其の重んずる所を強めて以て福を取り、小人曰び其の軽んずる所に安んじて以て禍を取る。或るひと曰く、「斯の道、豈に信ならんや」と。曰く、「何⁽⁶²⁾為れぞ其れ信ならずや。世の治まるるや、善を行ふ者福を獲、惡を為す者禍を得⁽⁶³⁾。其の乱るるに及びてや、善を行ふ者福を獲ず、惡を為す者禍を得ざるは変数⁽⁶⁴⁾なり。知者 変数を以て常道を疑はず。故に福のよりて来る所に循い、禍のよりて至る所を防ぐなり。遇不遇は我に非ざるなり、其の時なり。夫れ吉を施して凶を報いらるる、之を命と謂ひ、凶を施して吉を報いらるる、之を幸いと謂ふ。其の志す所を守らんのみ。易に曰く、『君子以て命を致し志を遂ぐ』と。然れども善を行ひて

福を獲ること猶ほ多く、惡を為して禍を得ざること猶ほ少なし。夫の二者を総べば、豈に多きを捨てて少なきに従ふべきや。曾子曰く、『人にして善を好まば、福未だ至らずと雖も、禍其れ遠し。人にして善を好まずんば、禍未だ至らずと雖も、福其れ遠し』と。故に詩に曰く、『習習たる谷風、惟れ山の崔巍。何の木か死せざらん、何の草か萎えざらん』と。言ふところは盛陽⁶⁴ 徳を布くの月、草木すら猶ほ枯落して時と謬^{たが}ふ者有り、況んや人事の応報をや、となり。故に歳の凶穰有るを以て其の稼穡を荒らす者は良農に非ざるなり。利の盈縮有るを以て其の資貨を棄つる者は良賈に非ざるなり。行ひの禍福有るを以て其の善道を改むる者は良士に非ざるなり。詩に云ふ、『顒顒^{ぎようかう}叩叩として珪の如く璋の如し。令聞令望あり、愷悌たる君子、四方 綱と為す』と。珪璋を挙げて以て其の徳を喩ふ。変ぜざるを貴ぶなり。

注

- (1) 脩本 卷下に務本篇があり、また『呂氏春秋』と『潛夫論』に務本篇、『說苑』に建本篇と類似の名を有する諸篇がいくつかあるが、内容的にはほとんど關連がない。またこの篇は、内容が多岐にわたっていて主題も一貫しておらず、全體として篇名はあまりそぐわしくないように思える。
- (2) 理道 他に用例が見えない。「治道」という語は多く見えるが、全て治政の道の意であり、治身の意味に用いた例はないようである。
- (3) 務本 『論語』學而篇「君子務本、本立而道生、」
- (4) 怨寡 『周易』繫辭下傳「困以寡怨、」 『荀子』君道篇「其於人也寡怨。寛裕而無阿、」
- (5) 讐多 『論語』里仁篇「放於利而行、多怨、」
- (6) 孔子之制春秋也云云 『公羊傳』隱公十年「春秋錄内而略外、於外大惡書、小惡不書、於内大惡諱、小惡書、」 何注「内小惡書、外小惡不書者、……明當先自正、然後正人、」 同成公十五年「春秋内其國而外諸夏、内諸夏而外夷狄、」
- (7) 明莫大乎自見 『韓非子』喻老篇「知之難、不在見人、在自見、故曰、自見之謂明、」 『論語』季氏篇「視思明、聽思聰、」
- (8) 窮天下之遠 『晏子春秋』内篇問上「辭令窮遠而不逆、」
- (9) 易曰云云 復卦の卦辭。
- (10) 見人之善云云 『荀子』修身篇「見善、修然必以自存也、見不善、愀然必以自省也、善在我、介然必以好也、不善在身、菑然必以自惡也、」
- (11) 隅坐 『禮記』檀弓下篇「曾子寢疾病、樂正子春坐於牀下、曾元・曾申坐於足、童子隅坐而執燭、」 注「隅坐、不與成人並、」
- (12) 冠綬 『禮記』内則篇「冠綬、」 孔疏「結纓頷下、以固冠結之、餘者散而下垂、謂之綬、」
- (13) 帶珮 『續漢書』禮儀志「最後親陵、遣計吏賜之帶珮、」
- (14) 盤銘之謂日新 『禮記』大學篇「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新、」
- (15) 易曰云云 繫辭上傳の文。
- (16) 孔子曰云云 出典不明。『孔子集語』に未收。
- (17) 自舍 『孟子』離婁上篇「自暴者不可與有言也、自棄者不可與有爲

也、……吾身不能居仁由義、謂之自棄也、

(18) 君子不恤年之將衰 『論語』述而篇「其爲人也、發憤忘食、樂以忘

憂、不知老之將至云爾、

(19) 言而不行 『墨子』兼愛下篇「使言行之合、猶合符節也、無言而不

行也、」 『穀梁傳』僖公二十二年「人之所以爲人者言也、……言之所

以爲言者信也、言而不信、何以爲信、信之所以爲信者道也、信而不道、

何以爲道、道之所貴者時、其行勢也、

(20) 行而不時 『周禮』秋官・野廬氏「以幾禁行作不時者不物者、」

但し、これは朝晩の規定時間外の行作を禁する意で、本文は一般に行

動が時節になっていないことをいう。

(21) 行異乎言 『呂氏春秋』淫辭篇「言行相詭、」 『淮南子』齊俗訓

「言與行相悖、」

(22) 有傷於仁 『論語』衛靈公篇「志士仁人、無求生以害仁、有殺身以

成仁、」

(23) 人之過在於哀死云云 墨子の節葬の思想の影響を受けたもののよう

にもみえるが、恐らくはむしろ當時名士たちに流行の薄葬論に共鳴し

たものである。

(24) 在於悔往云云 『論語』微子篇「往者不可諫、來者猶可追、」

已然 『史記』太史公自序「夫禮禁於未然之前、法施於已然之後、」

(25) 遂事 『論語』八佾篇「成事不說、遂事不諫、既往不咎、」

(26) 野人 『孟子』萬章上篇「此非君子之言、齊東野人之語也、」

(27) 孔子謂子張曰云云 出典不明。『孔子集語』勸學篇に收録。

(28) 書舉穆公之誓 『尚書』周書・秦誓篇を指す。秦の穆公が鄭を伐た

んとして晉に敗れ、歸りてその非を悔いて誓をなせしもの。

(29) 春秋書衛北宮括伐秦、善攝也 『春秋』襄公十四年「夏四月、叔孫

豹會晉荀偃・齊人・宋人・衛北宮括……伐秦、」 『左傳』「衛北宮括

不書於向、書於伐秦、攝也、」

(30) 瑾之挾瑕 『左傳』宣公十五年「瑾瑜匿瑕、國君含垢、天之道也、」

『禮記』聘義篇「瑕不揜瑜、瑜不揜瑕、忠也、」 注「玉之性、善惡

不相揜、

(32) 乘扁舟而濟者云云 『史記』貨殖傳「〔范蠡〕乃乘扁舟浮於江湖、」

集解「漢書音義曰、特舟也、」 索隱「服虔云、特舟也、國語云、范

蠡乘輕舟、」 俞樾は「漢書貨殖傳……注引孟康曰、特舟也、特舟則

不可以爲安、且與上文優者友多焉之旨不合矣、疑古稱扁舟有兩義、范

蠡扁舟、當讀爲偏、後漢書隗囂傳、乘偏舟於五湖、字正作偏是也、若

此文扁舟、則當讀爲編、言編列衆舟以濟、若諸侯維舟、大夫方舟之

類」というが、やや鑿ち過ぎである。この文は『荀子』勸學篇「假

舟楫者、非能水也、而絕江海」とほぼ同意であるから、一艘の小舟で

差支えない。

(33) 詩曰云云 大雅・棫樸の文。

(34) 先民有言 『詩』大雅・板「先民有言、詢于芻蕘、」 また『左傳』

哀公十五年・『禮記』坊記篇等にも見える。

(35) 著生乎微 『禮記』大學篇「莫見乎隱、莫顯乎微、」 幽と微を對

にした言い方としては『周易』繫辭下傳「夫易……微顯闡幽」がある。

(36) 宋井之霜云云 典據未詳。蓋し『周易』坤卦初六「履霜堅冰至」と

同じく、始めを謹む意であろう。

(37) 黃蘆之萌云云 典據未詳。「黃蘆」は黃色に枯れたアシ。「大暑」「中

暑」は夏の節氣で、『管子』幼官篇に見ゆ。

(38) 笄年 初めて成年となる年ごろ。童子の髪を束ねて兩角あるを年と

いう。

(39) 紒背 『爾雅』釋詁篇「黃髮、紒背、壽也、」

(40) 創乎夷原云云 「夷原」は平原、「喬嶽」は高山、それぞれ凡人・君

子の比喩。『荀子』勸學篇「其義則始乎爲士、終乎爲聖人、」

(41) 易曰云云 升卦の卦辭。

(42) 積小致大之謂也 升卦大象「地中生木升、君子以順德、積小以高

大、」

(43) 孔子曰云云 出典不明。『孔子集語』勸學篇に收録。

(44) 一日之不能善矣久 『禮記』中庸篇「中庸其至矣乎、民鮮能久矣、」

- (45) 惡惡 『公羊傳』僖公十七年「君子之惡。惡也疾始、善善也樂終、」同昭公二十年「惡。惡止其身、善善及子孫、」
- (46) 子思曰云云 出典不明だが、恐らく『子思子』にあった文章であろう。黃以周輯本卷六に收録。
- (47) 一切之身 一切を七尺とする通説に従えば、一五八センチメートル。ただ貴驗篇に「八尺之中」というから、徐氏は或いは一切八尺としていたのかもしれない。
- (48) 慎其寡 他に用例が見えないが、「慎獨」「慎微」とほぼ同意であろう。
- (49) 攻玉 『詩』小雅・鶴鳴「他山之石、可以攻玉、」
- (50) 涉歴 蔡琰「胡笳十八拍」尋思涉歴令多難阻、
- (51) 四時嘿而成 『論語』陽貨篇「天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言也、」
- (52) 德配乎天地云云 『周易』乾卦文言「夫大人者、與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶、」
- (53) 虞舜 『尚書』虞書・堯典篇「師錫帝曰、有齔在下、曰虞舜、」(『史記』五帝本紀は「有矜在民間、曰虞舜」に作る。)
- (54) 大禹 『尚書』に大禹謨篇があり、その孔傳に「禹稱大、大其功」とある。僞古文ではあるが、解釋はそのまま適用できよう。なお舜の布衣時代の傳説は『孟子』等に見えるが、禹のそれはほとんど傳わらない。
- (55) 文采 『老子』第五十三章「服文綵、帶利劍、」
- (56) 曾子曰云云 『論語』泰伯篇の文。
- (57) 任不重云云 『荀子』大略篇「歲不寒、無以知松柏、事不難、無以知君子、」
- (58) 變數 常數に對していう。變は詩の變風・變雅の變。
- (59) 常道 『荀子』天論篇「天有常道矣、地有常數矣、」
- (60) 遇不遇非我也 『荀子』有坐篇「遇不遇者時也、死生者命也、」(また『韓詩外傳』卷七・『說苑』雜言篇に見ゆ。『漢書』揚雄傳「遇不遇、命也、」
- (61) 易曰云云 困卦大象の文。
- (62) 曾子曰云云 出典不明。恐らく『漢書』藝文志に所載の『曾子』十八篇中から引いたものである。王定安『曾子家語』三省篇に收録。
- (63) 詩曰云云 小雅・谷風の文。
- (64) 盛陽布德之月云云 谷風毛傳「雖盛夏萬物茂壯、草木無有不死而萎枝者、」箋「盛夏養萬物之時、草木枝葉猶有萎稿者、」王先謙は魯毛同義という。
- (65) 應報 『漢書』劉向傳などにも用例はあるが、いわゆる因果應報の意味で使用したものは、外典の中でこれが最も早いようである。
- (66) 良農 『荀子』修身篇「良農不爲水旱不耕、良賈不爲析閤不市、」
- (67) 良賈 前注參照。
- (68) 良士 『詩』唐風・蟋蟀「好樂無荒、良士瞿瞿、」
- (69) 詩云云云 大雅・卷阿の文。
- (70) 以喻其德 『爾雅』釋言篇「顒顒印印、君之德也、」但し、必ずしも君王の德には限定していない。

虛道第四

人之爲德。其猶器歟。器虛則物注。^(三)滿則止焉。故君子常虛其心志。恭其容貌。不以逸羣之才加乎衆人之上。視彼猶賢。自視猶不足也。故人願告之而不厭。誨之而不倦。易曰。君子以虛受人。詩曰。彼姝者子。何以告之。君子之於善道也。大則大識之。小則小識之。善無大小。咸載於心。然後舉而行之。我之所有。既不可奪。而我之所無。又取於人。是以功常前人。而人後之也。故夫才敏過人。未足貴也。博辯過人。未足貴也。勇決過人。未足貴也。君子之所貴者。遷善恐其不及。改惡懼其有餘。故孔子曰。顏氏之子。其殆庶幾乎。有不善。未嘗不知。知之未嘗復行。夫惡猶疾也。攻之則益。不攻則日甚。故君子相求也。非特興善也。將以攻惡也。惡不廢。則善不興。自然之道也。易曰。比之匪人。不利君子貞。大往小來。陰長陽消之謂也。先民有言。人之所難者二。樂攻其惡者難。以惡告人者難。夫惟君子。然後能爲己之所難能。致人之所難致。既能其所難也。猶恐舉人惡之輕而舍己惡之重。君子患其如此也。故反之復之。鑽之核之。然後彼之所懷者竭。始盡知己惡之重矣。既知己惡之重者。而不能取彼。又將舍己。況拒之者乎。夫酒食。人之所愛者也。而人相見莫不進焉。不吝於所愛者。以彼之嗜之也。使嗜忠言甚於酒食。人豈愛之。故忠言之不出。以未有嗜之者也。詩云。匪言不能。胡斯畏忌。目也者。能遠察天際而不能近見其眚。心亦如之。君子誠知心之似目也。是以務鑒於人。以觀得失。故視不過垣牆之裏而見邦國之表。聽不過闕桷之內而聞千里之外。因人也。人之耳目。盡爲我用。則我之聰明。無敵於天下矣。是謂人一之。我萬之。人塞之。我通之。故知其高不可爲員。其廣不可爲方。先王之禮。左史記事。右史記言。師瞽誦詩。庶僚箴誨。器用載銘。筵席書戒。月考其爲。歲會其行。所以自供正也。昔衛武公年過九十。猶夙夜不怠。思聞訓道。命其羣臣曰。無謂我老耄而舍我。必朝夕交戒。又作抑詩以自儆也。衛人誦其德。爲賦淇澳。且曰。睿聖。凡興國之君。未有不然者也。故易曰。君子以恐懼脩省。下愚反此道也。以爲己既仁矣智矣。神矣明矣。兼此四者。何求乎衆人。是以辜罪昭著。腥德發聞。百姓傷心。鬼神怨痛。曾不自聞。愈休如也。若有告之者。則曰。斯事也。徒生乎子心。出乎子口。於是刑焉戮焉。辱焉禍焉。不能免。則曰。與我異德故也。未達我道故

也。又安足責。是己之非。遂初之繆。至於身危國亡。可痛也夫。^(二十一)詩曰。誨爾諄諄。聽之藐藐。^(二十二)匪用爲教。覆用爲虐。蓋聞舜之在鄉黨也。非家饋而戶贈之也。人莫不稱善焉。象之在鄉黨也。非家奪而戶掠之也。人莫不稱惡焉。由此觀之。人無賢愚。見善則譽之。見惡則謗之。此人情也。未必有私愛也。未必有私憎也。今夫立身不爲人之所譽。而爲人之所謗者。未盡爲善之理也。盡爲善之理。將若舜焉。人雖與舜不同。其敢謗之乎。故語稱。救寒莫如重裘。止謗莫如脩身。療暑莫如親冰。^(二十四)信矣哉。

校記

- (一) 原文器上有「虛」字、治要無、錢本據治要刪、按錢校是也、今據而刪、
- (二) 鈔本治要、「注」作「往」、譌、
- (三) 治要「足」作「肖」、
- (四) 原文無「而不厭誨之」五字、治要有五字、錢本據治要補、按錢校是也、今從而補、
- (五) 「辯」、治要·王本·子書本·百子本作「辨」、梁氏云、「辯辨、古通用、」
- (六) 治要益上有「日」字、
- (七) 治要子下有「之」字、錢本據治要補、按無亦可通、今姑依舊、意林「求」作「見」、
- (八) 治要「興」作「與」、梁氏云、「案、與舉也、義雖可通、然據下文惡不廢則善不興、則作興、文乃一律、意林仍作興、」按鈔本治要仍作興、通行本作與者、不過誤刻耳、

(九) 駱建人『徐幹中論研究』云(梁氏引)、「比之匪人句、出自周易比卦象辭、象曰、比之自內、不自失也、六三、比之匪人、象曰、比之匪人、惟下文則爲不亦傷乎、與徐氏所引不僅異辭、且義亦未可通也、復案周易否卦卦辭曰、否之匪人、不利君子、貞、大往小來、象曰、否之匪人、不利君子、貞、大往小來、則是天地不交而萬物不通也、上下不交而天下无邦也、內陰而外陽、內柔而外剛、內小人而外君子、小人道長、君子道消也、以否卦卦辭論之、則較徐氏所引辭同義近、原旨亦相合也、」梁氏云、「案、駱說是、比與否音近致誤、」按二說雖似是、而猶未究、按周易集解、虞翻曰、(否)陰消乾、又反泰也、謂三比坤滅乾、以臣弑其君、子弑其父、故曰匪人、陰來滅

陽、君子道消、故不利君子貞、陰信陽誦、故大往小來、則是天地不交而萬物不通、與比三同義也、李道平纂疏曰、比三體剝、剝四曰、剝牀以膚、弑父弑君、故曰比之匪人、否三亦體剝艮膚也、故云與比三同義也、然則漢魏易家有以比之匪人與否之匪人爲同義之解、蓋徐氏據此說以混兩卦而爲一也、不須改比爲否、今依舊、

(十) 治要「攻」作「知」、

(十一) 原文上「致」字作「到」、治要二句作「能爲己之所難、能致人之所難」、札記云、「(原本)蓋妄人綴補、今据治要刪正、」梁氏以能句絕、而云、「作致是、錢氏所改、文義至拙、非、」按據下文既能其所難也、則錢校似較勝、然梁氏所說、亦非無理、未知孰是、今姑依舊、唯到改作致、

(十二) 治要無「者」字、

(十三) 「忠言」原文作「者」一字、治要作忠言、錢本據治要改、梁氏云、「錢校是也、下文故忠言之不出、以未有嗜之者也、即承上文而言、」按錢校是也、今從而改、

(十四) 治要愛上有「其」字、句末有「乎」字、錢本並據治要補、按無亦可通、今姑依舊、

(十五) 鈔本治要、「有」作「良」、尾張本眉注、未有舊作未良、改之、

(十六) 原文二句作「能遠察而不能近見、其心亦如之」、諸本(除胡本)有注云、「一本作能遠察天際而不能近見其背、心亦如之、」治要作「遠察天際而不能近見其眦、心亦如之」、札記云、「注一本作云云、背即背字之誤也、今据治要補正、」按錢校是也、今從補正、

(十七) 槧下、諸本(除胡本)有注云、「門南旁木也、」

(十八) 治要人下有「之耳目」三字、錢本據治要補、按錢校雖似是、而無亦不害文義、今姑依舊、

(十九) 治要句末有「我」字、

(二十) 俞云、「且乃目字之誤、」按原文仍可通、俞說不過推度之辭、今依舊、

(二十一) 「不能免」治要作「不然」二字、

(二十二) 「也」字、胡本同、他本皆作「矣」、治要「夫」作「已」、

(二十三) 今本毛詩、「之」作「我」、王先謙云、「中論作之、恐轉寫之訛、」按王說是蓋然之辭、而非有明據、今姑依舊、

(二十四) 錢本改「親冰」作「清水」、札記云、「清水原譌親冰、據意林改、意林此句引在救寒之上、於文義次序爲合、今姑從原本、」梁氏云、

「錢氏所據學津討原本意林如此、四部叢刊本(武英殿聚珍版本)作親水、作親水是、錢氏失檢、」按冰水兩通、今姑依舊、

虚道第四^①

人の徳たる、其れ猶ほ器のごときか。器 虚しければ則ち物注ぎ、満つれば則ち止む。故に君子常に其の心志を虚しうし、其の容貌を恭しくし、逸群の才を以て衆人の上に加へず。彼を視ること猶ほ賢のごとく、自ら視ること猶ほ足らざるがごとくするなり。故に人 之に告ぐるを願ひて厭はず、之に誨へて倦まず。易に曰く、「君子以て虚にして人を受く」と。詩に曰く、「彼の姝たる者の子、何を以て之に告げん」と。君子の善道に於けるや、大なれば則ち大いに之を識り、小なれば則ち小しく之を識る。善 大小と無く、咸心に載め、然る後挙げて之を行ふ。我の有する所は既に奪ふべからずして、我の無き所は又た人に取り。是を以て功常に人に前んじて、人 之に後るるなり。故に夫れ才敏人に過ぐるは、未だ貴ぶに足らざるなり。博弁人に過ぐるも、未だ貴ぶに足らざるなり。勇決人に過ぐるも、未だ貴ぶに足らざるなり。君子の貴ぶ所は、善に遷りて其の及ばざるを恐れ、悪を改めて其の余り有るを懼るることなり。故に孔子曰く、「顔氏の子、其れ殆ど庶幾からんか。不善有れば、未だ嘗て知らずんばあらず、之を知れば未だ嘗て復た行はず」と。夫れ悪は猶ほ疾のごときなり。之を攻むれば則ち益ます悛まり、攻めざれば則ち日び甚し。故に君子の相求むるや、特だに善を興すのみに非ざるなり。将に以て悪を攻めんとするなり。悪廃せられざれば則ち善興らざるは、自然の道なり。易に曰く、「比の人に匪ざる、君子の貞に利あらず。大往き小来る」と。陰長じ陽消ゆるの謂なり。先民言へる有り、「人の難ずる所の者二あり。其の悪を攻むるを樂しむ者難し。悪を以て人に告ぐる者難し」と。夫れ惟だ君子にして然る後能く己の能くし難き所を為し、人の致し難き所を致す。既に其の難ずる所を能くするも、猶ほ人の悪の輕きを挙げ、己が悪の重きを舍つるを恐る。君子 其の此くの如きを患ひ、故に之を反し之を復し之を鑽し之を核し、然る後に彼の懷く所の者竭き、始めて尽く己が悪の重きを知れり。既

に己が惡の重きを知る者にして彼に取る能はずんば、又た將に己(が惡)を捨てんとす。況んや之を拒む者をや。夫れ酒食は人の愛む所の者なり。而るに人 相見るに焉を進めざるは莫し。愛む所に吝ならざるは、彼の之を嗜むを以てなり。使し忠言を嗜むこと酒食より甚しからば、人豈に之を愛まんや。故に忠言の出でざるは、未だ之を嗜む者有らざるを以てなり。詩に云ふ、「言ふこと能はざるに匪ず、胡ぞ斯に畏忌するや」と。目なる者は、能く遠く天際を察するも、近く其の眚を見る能はず。心も亦たかくの如し。君子 誠に心の目に似たるを知るなり。是を以て務めて人に鑑み、以て得失を觀る。故に視ること垣墻の裏を過ぎずして邦国の表を見、聴くこと闕塾の内を過ぎずして千里の外を聞く。人に因ればなり。人の耳目、尽く我が用と為れば、則ち我の聰明、天下に敵無し。是れを人之を一にせば我之を万にし、人之を塞がば我之を通ずと謂ふ。故に其の高さ員を為すべからず、其の広さ方を為すべからざるを知る。先王の礼、左史事を記し、右史言を記し、師瞽詩を誦し、庶僚箴誨し、器用 銘を載せ、筵席に戒を書す。月に其の為を考へ、歳に其の行を会す。自ら正を供する所以なり。昔 衛の武公、年九十を過ぐるも猶ほ夙夜怠らず、訓道を聞かんことを思ひき。其の群臣に命じて曰く、「我を老耄と謂ひて我を舍つること無かれ。必ず朝夕交ごも戒めよ」と。又た抑の詩を作りて以て自ら儆せり。衛人其の徳を誦し、為に淇奥を賦し、且つ睿聖と曰ふ。凡そ国を興すの君、未だ然らざる者有らざるなり。故に易に曰く、「君子以て恐懼脩省す」と。下愚は此の道に反するなり。以為へらく、己既に仁なり、智なり、神なり、明なり。此の四者を兼ねれば、何ぞ衆人に求めん、と。是を以て辜罪昭著に、腥徳発聞す。百姓心を傷め、鬼神怨痛するに、曾ち自ら聞かず、愈いよ休如たり。若し之に告ぐる者有らば、則ち曰く、「斯の事や、徒だ子の心に生じ、子の口に出づるのみ」と。是に於て焉を刑し焉を戮し、焉を辱め焉に禍す。免るる能はずんば、則ち曰く、「我と徳を異にするが故なり。未だ我が道に達せざるが故なり。又た安んぞ責むるに足らんや」と。己の非を是とし、初めの繆りを遂げ、身危く国亡ぶに至る。痛むべきなるかな。詩に曰く、「爾を誨ふこと諄諄たるも、之を聞くこと藐藐たり。用て教へと為すに匪ず、覆つて用て虐と為す」と。蓋し聞く、舜の

郷党に在るや、家ごとに饋り戸ごとに贈るに非ざるに、人 善を称せざる莫かりけり。象の郷党に在るや、家ごとに奪ひ戸ごとに掠むるに非ざるに、人 惡を称せざる莫かりけり。此れ由りて之を觀れば、人 賢愚と無く、善を見れば則ち之を譽め、惡を見れば則ち之を謗る。此れ人情なり。未だ必ずしも私愛有らざるなり、未だ必ずしも私憎有らざるなり。今夫れ身を立つるに、人の譽むる所と為らずして人の謗る所と為るは、未だ善を為すの理を尽くさざればなり。善を為すの理を尽くせば、將に舜の若からんとす。人舜と同じからずと雖も、其れ敢て之を謗らんや。故語に称すらく、「寒を救ふは裘を重ぬるに如くは莫く、謗を止むるは身を脩むるに如くは莫く、暑を療するは氷に親しむに如くは莫し」と。信なるかな。

注

- (1) 虛道 普通には惡しき意味に用い、このように善義に用いる例は他にほとんど見えない。或いは徐氏の造語か。
- (2) 其猶器歟 人の行動を器に喩えたものとしては、『荀子』宥坐篇に「孔子觀於魯桓公之廟、有欿器焉、……子曰、吾聞、宥坐之器者、虛則欿、中則正、滿則覆、……吁、惡有滿而不覆者哉!」(『韓詩外傳』卷三・『淮南子』道應訓・『說苑』敬慎篇にも見ゆ)という文章があり、徐氏の發想の一助をなしたと思われる。ただ、徐氏が謙虛を以て己を行ふを説くに對し、『荀子』は盈滿を避けて中庸を宗とすべきを説いており、若干ニュアンスが異なる。
- (3) 虛其心志 『老子』第三章「聖人治、虛其心、實其腹、」『莊子』漁父篇「得聞聖教、敢不虛心、」
- (4) 恭其容貌 『尚書』周書・洪範篇「五事、一曰貌、……貌曰恭、」
- (5) 逸羣之才 『三國志』蜀書・諸葛亮傳「亮少有逸羣之才、英霸之器、」
- (6) 自視 『孟子』盡心上篇「如其自視、欲然、則過人遠矣、」
- (7) 誨之而不倦 『論語』述而篇「子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉、」又「抑爲之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已矣、」
- (8) 易曰云云 咸卦大象の文。
- (9) 詩云云 鄘風・干旄の文。王先謙は「幹用魯詩、其說亦與本義相發」と云うが、毛序には「美好善也、衛文公臣子多好善、賢者樂告以善道」とあり、「善道」ということばなどからみて、ここはむしろ毛詩說に基づくものかもしれない。
- (10) 才敏過人 『史記』項羽紀「籍長八尺、……才氣過人、」なお「才敏」という語は、『三國志』諸葛亮傳等に見える。
- (11) 博辯 『史記』孔子世家「博辯廣大、危其身者、發人之惡者也、」
- (12) 遷善 『法言』學行篇「是以君子貴遷善、遷善者、聖人之徒與、」『周易』益卦大象「風雷益、君子以見善則遷、有過則改、」『孟子』盡心上篇「民日遷善、而不知爲之者、」
- (13) 不及 『論語』季氏篇「孔子曰、見善如不及、見不善如探湯、」
- (14) 孔子曰云云 『周易』繫辭下傳の文。
- (15) 攻之 『周禮』天官・瘍醫「凡瘡瘍以五毒攻之、」注「攻、治也、」
- (16) 易曰云云 「比之匪人」は比卦六三の爻辭、「不利君子貞、大往小來」は否卦の卦辭。なお校記(九)参照。
- (17) 能爲己之所難能 下の能字を下句に屬して、「能く己の難ずる所を爲す」と讀むほうが自然だが、それだと下句と文例が一律にならない。或いは難の下に爲字を脱するか。なお校記(十一)参照。

- (18) 舉人惡之輕 少し意味あい異なるが、似た表現として、『荀子』不苟篇「君子崇人之德、揚人之美、非諂諛也、正義直指、舉人之過、非毀疵也、」
- (19) 反之復之 何度も繰り返し考え調べることを。ぴったりの用例は見當らないが、一應次の二例を挙げておく。『莊子』大宗師篇「反覆終始、不知端倪、」『周易』乾卦象傳「終日乾乾、反復道也、」なお「反之」という表現は『論語』述而篇に見える。
- (20) 鑽之核之 『論語』子罕篇「仰之彌高、鑽之彌堅、」核は覈と同じ、調べ究める意。
- (21) 酒食 『禮記』曲禮上篇「爲酒食以召鄉黨僚友、」
- (22) 忠言 『史記』留侯世家「忠言逆耳利於行、毒藥苦口利於病、」(又見於『說苑』正諫篇・『孔子家語』六本篇)
- (23) 詩云云 大雅・桑柔の文。
- (24) 天際 『周易』豐卦上六「象曰、豐其屋、天際翔也、」
- (25) 觀得失 『史記』韓非傳「觀往者得失之變、故作孤憤……、」
- (26) 闕樂 『說文』六上「闕、門楣也、」しきみ。『穀梁傳』昭公八年集解「樂、門中臬、」釋文「樂、門樂也、」
- (27) 千里之外 『史記』留侯世家「運籌策帷帳中、決勝千里外、」
- (28) 其高不可爲員云云 その聰明の高大なること畫限すべからざるを謂う。
- (29) 左史記事云云 『禮記』玉藻篇「動則左史書之、言則右史書之、」『漢書』藝文志では左右が逆になっている。
- (30) 師瞽誦詩云云 『左傳』襄公十四年「自王以下、各有父兄子弟、以補察其政、史爲書、瞽爲詩、工誦箴、諫、大夫規誨、士傳言、庶人謗、商旅于市、百工獻藝、」『國語』晉語六「古之王者、政德既成、又聽於民、於是乎使工誦諫於朝、在列者獻詩使勿貳、風聽臚言於市、辨祇祥於謠、……有邪而正之、盡戒之術也、」
- (31) 器用載銘 銘については、『禮記』祭統篇に「夫鼎有銘、銘者自名也、自名以稱揚其先祖之美而明著之後世者也云云」とあるのが基論と

- なるが、これは銘をもつばら先祖の功名を顯彰するためのものとしており、自戒の具とする徐氏とはかなり相違している。徐氏は恐らく『大學』の盤銘あたりを意識しているのであろう。なお「器用」という語は、『左傳』隱公五年および十一年・『國語』周語上等に見える。
- (32) 筵席書戒 典據未詳。宴席で諫言を行った例は『左傳』『國語』『晏子春秋』等の諸書に数多く見えている。なお「筵席」という語は、『禮記』樂記篇・『史記』樂書等に見える。
- (33) 歲會其行 典據未詳。『周禮』などの年度末において功績を考課する法を、君道にまで擴大して考えたものであろうか。
- (34) 昔衛武公云云 『國語』楚語上「昔衛武公年數九十有五矣、猶箴儆於國、曰、自卿以下、至於師長士、苟在朝者、無謂我老耄而舍我、必恭恪於朝、朝夕以交戒我、聞一二之言、必誦志而納之、以訓導我、在與有旅賁之規、位有官師之典、倚几有誦訓之諫、居寢有藝御之箴、臨事有瞽師之導、宴居有師工之誦、史不失書、矜不失誦、以訓御之、於是乎作懿戒以自儆也、及其沒也、謂之睿聖武公、」
- (35) 又作抑詩以自儆也 前注參照。韋注「懿、詩大雅抑之篇也、懿、讀之曰抑、毛詩序曰、抑、衛武公刺厲王、亦以自儆(今本作警)也、」抑正義引く『韓詩翼要』に「衛武公刺王室、亦以自戒、計年九十有五、猶使人日誦是詩、而不離於其側」とあり、毛・韓説ともに抑を武公自戒の詩としていることが知られる。魯詩説も同様であったと推定されるが、ただ厲王に對する刺詩としたかどうかはわからない。
- (36) 爲賦淇澳 『毛詩』衛風・淇澳序「美武公之德也、有文章、又能聽其規諫、以禮自防、故能入相于周、美而作是詩也、」王先謙は魯毛同説というが、これも毛詩説に基づくものかもしれない。
- (37) 睿聖 注(34)參照。
- (38) 易曰云云 震卦大象の文。
- (39) 下愚 『論語』陽貨篇「唯上知與下愚不移、」
- (40) 仁矣智矣 『孟子』公孫丑上篇「仁且智、夫子既聖矣、」

- (41) 腥德發聞 『尙書』周書・酒誥篇「庶群自酒、腥聞在上、故天降喪于殷、」
- (42) 鬼神怨痛 『國語』周語上「民神怨痛、無所依懷、」
- (43) 休如 猶お休休と言うがごとし。安逸なる貌。
- (44) 遂初之繆 『新書』過秦下篇「秦王足己而不問、遂過而不變、」
- (45) 詩曰云云 大雅・抑の文。鄭箋「我教告主、口語諄諄然、王聽聆之貌藐然忽略、不用我所言、」
- (46) 舜之在鄉黨也云云 典據未詳。諸書の記事を總合してかくのごとくいうのであらう。參考として次の二例を擧げておく。『孟子』公孫丑上篇「大舜有大焉、善與人同、舍己從人、樂取於人以爲善、」同盡心上篇「（舜）及其聞一善、見一善行、若決江河、沛然莫之能禦也、」
- (47) 私愛 『管子』樞言篇「天下無私愛也、無私憎也、」
- (48) 立身 『孝經』開宗明義章「立身行道、揚名後世、」
- (49) 爲善 『孟子』盡心上篇「雞鳴而起、孳孳爲善者、舜之徒也、」

貴驗第五

事莫貴乎有驗。言莫棄乎無徵。言之未有益也。不言未有損也。水之寒也。火之熱也。金石之堅剛也。此數物未嘗有言。而人莫不知其然者。信著乎其體也。使吾所行之信若彼數物。而誰其疑我哉。今不信吾所行。而怨人之不信己。猶教人執鬼縛魅。而怨人之不得也。惑亦甚矣。孔子曰。欲人之信己也。則微言而篤行之。篤行之。則用日久。用日久。則事著明。事著明。則有目者莫不見也。有耳者莫不聞也。其可誣哉。故根深而枝葉茂。行久而名譽遠。易曰。恆亨。無咎。利貞。言久於其道也。伊尹放太甲。展季覆寒女。商魯之民。不稱淫篡焉。何則積之於素也。故染不積。則人不觀其色。行不積。則人不信其事。子思曰。同言而信。信在言前也。同令而化。化在令外也。謗言也皆緣類而作。倚事而興。加其似者也。誰謂華岱之不高。江漢之不長與。君子脩德。亦高而長之。將何患矣。夫求己而不求諸人。非自強也。見其所存之富耳。子思曰。事自名也。聲自呼也。貌自眩也。物自處也。人自官也。無非自己者。故怨人之謂壅。怨己之謂通。通也知所悔。壅也遂所誤。遂所誤也。親戚離之。知所悔也。疏遠附之。疏遠附也常安樂。親戚離也常危懼。自生民以來。未有不然者也。殷紂爲天子而稱獨夫。仲尼爲匹夫而稱素王。盡此類也。故善釣者不易淵而得魚。君子不降席而追道。治乎八尺之中。而德化光矣。古之人謬曰。相彼玄

鳥。止于陵阪。仁道在近。求之無遠。人情也莫不惡謗。而卒不免乎謗。其故何也。非愛致力而不已之也。已之之術反也。謗之爲名也。逃之而愈至。^(十一)距之而愈來。訟之而愈多。明乎此。則君子不足爲也。闇乎此。則小人不足得也。帝舜屢省。禹拜昌言。明乎此者也。厲王蒙戮。^(十二)吳起刺之。闇乎此者也。夫人也皆書名前策。著形列圖。或爲世法。或爲世戒。可不慎之。^(十三)曾子曰。或言予之善。予惟恐其聞。或言予之不善。惟恐過而見予之鄙色焉。故君子服過也。非徒飾其辭而已。誠發乎中心。形乎容貌。其愛之也深。其更之也速。如追兔。惟恐不逮。故有進業無退功。詩曰。相彼脊令。^(十四)載飛載鳴。我日斯邁。而月斯征。遷善不懈之謂也。夫聞過而不改。謂之喪心。思過而不改。謂之失體。失體喪心之人。禍亂之所及也。君子舍旃。周書有言。人母鹽於水。鹽於人也。鹽也者可以察形。言也者可以知德。小人恥其面之不及子都也。君子恥其行之不及堯舜也。故小人尙明鹽。君子尙至言。至言也。非賢友。則無取之。故君子必求賢友也。詩曰。伐木丁丁。鳥鳴嚶嚶。出自幽谷。遷于喬木。言朋友之義。務在切直以升於善道者也。故君子不友不如己者也。非羞彼而大我也。不如己者。須己而植者也。^(十五)然則扶人不暇。將誰相我哉。吾之僨也。亦無日矣。故墳庫則水縱。^(十六)友邪則己僻也。^(十七)是以君子慎取友也。孔子曰。居而得賢友。福之次也。夫賢者。言足聽。貌足象。行足法。加乎善獎人之美。而好攝人之過。其不隱也如影。其不諱也如響。故我之憚之。若嚴君在堂而神明處室矣。雖欲爲不善。其敢乎。故求益者之居遊也。必近所畏。而遠所易。詩云。無棄爾輔。員于爾幅。屢顧爾僕。不輸爾載。親賢求助之謂也。

校記

- (一) 治要「此」作「彼」、
- (二) 治要無「而」字、
- (三) 「己」原文作「也」、治要作己、按有己乃文義足矣、今據治要改、
- (四) 治要「哉」作「乎」、

(五) 札記云、「按後漢書宣秉王良傳論曰、語曰、同言而信、則信在言前、同令而行、則誠在令外、章懷注、此皆子思子累德篇之言、意林及御覽卷三百九十、又卷四百三十引子思子、與中論同、並無二也字、今子思子已逸、未知孰是、」按子思子本作同令而行誠在令外、意林及御覽所引、不過抽自中論而已、但古人援用、不必墨守原文、而以意變改不爲尠、蓋此亦徐氏所改也、今依舊、

(六) 俞云、「皆字乃者字之誤、」按俞說非、下文有人情也莫不惡謗之句、某某也是徐氏所常用之語法也、不要有者字、

(七) 俞云、「眩當作炫、乃炫耀之謂、非眩惑之義、方與上下句一律、」梁氏云、「眩借爲炫、非誤字、楚辭九歎遠逝、揚菁華以眩耀兮、洪興祖補注云、炫耀、光貌、一作耀、眩亦炫之借字、」按梁說是也、

(八) 札記云、「盡疑當作蓋、」按錢說雖似得之、然既是推度之言、又作盡非不可通、今姑依舊、

(九) 「得」原文作「殉」、御覽卷八三四引作「善釣不易坻而得魚」、俞云、「易字無義、疑戛字之誤、說文又部、戛、入水有所取也、學者罕見戛、故誤爲易字、」梁氏云、「補錄改易爲戛、近迂、易、改也、換也、御覽引作得魚、是也、殉得、形似易致誤、意謂善釣者不必改易淵潭、亦可得魚也、愈說非、」按梁說是也、今據御覽改、

(十) 治要「致」作「智」、

(十一) 治要「距」作「拒」、

(十二) 治要「蒙」作「加」、

(十三) 原文無「夫人也」三字、治要有、錢本據治要補、梁氏云、「錢本增此三字、則文義順足、」按錢校是也、今從而補、

(十四) 治要「之」作「歟」、錢本據治要改、按作之亦可通、今姑依舊、

(十五) 今本毛詩、「相」作「題」、傳云、「題、視也、」王先謙云、「魯題作相、」

(十六) 二「及」字、意林·御覽卷八一及卷三六五引並作「如」、又並無兩「之」字、兩「也」字、下「及」字、胡本同、他本皆作「如」、

(十七) 意林及御覽八一、「堯舜」作「舜禹」、

(十八) 意林「尙」作「貴」、

(十九) 治要「植」作「慎」、札記云、「治要似誤、」

(二十) 此句原文作「故墳則縱多」、胡本同、杜本·程本墳下空二字、何本·王本·子書本·百子本並補極字、治要作「故墳庫則水縱」、錢本據治要改、按錢校是也、蓋墳涉上文墳字譌作墳、又下脫一字、後人不解文義、而擅改水縱爲縱多、今從錢校改、

驗を貴ぶ第五

事は驗有るより貴きは莫く、言は微無きより棄てらるるは莫し。之を言へども未だ益有らざるなり。言はざるも未だ損有らざるなり。水の寒きや、火の熱きや、金石の堅剛なるや、此の数物未だ嘗て言ふこと有らざるに、而も人 其の然るを知らざる莫きは、信 其の体に著るればなり。吾が行ふ所の信をして彼の数物の若くならしめば、而ち誰か其れ我を疑はんや。今 吾の行ふ所を信ならしめずして、而も人の己を信ぜざるを怨むは、猶ほ人をして鬼を執へ魅を縛らしめて、而も人の得ざるを怨むがときなり。惑ひ亦た甚しきかな。孔子曰く、「人の己を信ぜんことを欲せば、則ち言を微して篤く之を行へ。篤く之を行へば、則ち用ひらるること日びに久し。用ひらるること日びに久しければ、則ち事著明なり。事著明なれば、則ち目有る者見ざる莫く、耳有る者聞かざる莫きなり。其れ誣ふべけんや」と。故に根深くして枝葉茂り、行ひ久くして名誉遠し。易に曰く、「恒は享る。咎無し。貞しきに利し」と。言ふところは其の道に久しうすとなり。伊尹 太甲を放ち、展季 寒女を覆ふも、商魯の民、淫篡と称せず。何となれば則ち之を素に積めばなり。故に染むること積まざれば、則ち人 其の色を觀ず、行ひ積まざれば、則ち人 其の事を信ぜず。子思曰く、「同に言ひて信ぜらるるは、信 言の前に在るなり。同に令して化するは、化 令の外に在るなり」と。謗言や皆類に縁りて作り、事に倚りて興る。其の似たる者を加ふるなり。誰か華・岱を高からず、江・漢を長からずと謂はんや。君子の徳を脩むるも亦た高くして之を長くせば、將に何をか患へんとす。夫れ己に求めて諸人を人に求めざるは、自ら強むるに非ざるなり。其の存する所の富を見んのみ。子思曰く、「事 自ら名づくなり。声 自ら呼ばふなり。貌 自ら眩すなり。物 自ら処るなり。人 自ら官するなり。己に自らに非ざる者無し」と。故に人を怨むをこれ壅と謂ひ、己を怨むをこれ通と謂ふ。通や悔ゆる所を知り、壅や誤る所を遂

ぐ。誤る所を遂ぐるや、親戚も之を離れ、悔ゆる所を知るや、²¹疏遠も之に附す。疏遠の附するや常に安樂に、²²親戚の離るるや常に危懼なり。²³生民より以来、未だ然らざる者有らざるなり。²⁴殷紂天子たりしも独夫と称し、仲尼²⁵匹夫たりしも素王と称するは尽く此の類なり。故に善く釣る者は淵を易へずして魚を得、²⁶君子席を降らずして道を追ふ。八尺の中を治めて²⁷徳化光いなり。古の人歌ひて曰く、「彼の玄鳥を相るに、²⁸陵阪に止まる。仁道²⁹近きに在るに、之を無遠に求む」と。人情や謗を惡まざる莫きに、而も卒に謗を免れず。其の故何ぞや。力を致すを愛みて之を已めざるに非ざるなり。之を已むるの術反すればなり。謗の名たるや、之を逃るるも愈いよ至り、之を距むも愈いよ来り、之を訟ふも愈いよ多し。³⁰此れに明らかれば則ち君子も為すに足らざるなり。此に聞ければ則ち小人も得るに足らざるなり。³¹帝舜の屢しば省み、禹の昌言を拝せしは此れに明らかなる者なり。³²厲王の戮を蒙り、³³呉起の刺されしは此れに聞き者なり。夫の人や皆名を前策に書し、形を列図に著せども、或いは世の法と為り、或は世の戒めと為る。之を慎まざるべけんや。³⁴曾子曰く、「或るひと予の善を言はば、予惟だ其の聞くを恐る。或るひと予の不善を言はば、惟だ過りて予の鄙色を見るを恐る」と。故に君子の過ちに服するや、徒だに其の辞を飾るのみに非ず。誠中心に発し、容貌に形る。³⁵其の之を愛するや深く、其の之を更むるや速かなり。兎を追ふが如く、惟だ速ばざるを恐る。³⁶故に進業有りて退功無し。詩に曰く、「彼の脊令を相るに、³⁷載ち飛び載ち鳴く。我日³⁸び斯に邁き、而月³⁹に斯に征く」と。善に遷りて懈らざるの謂なり。夫れ過ちを聞きて改めざる、之を心を喪ふと謂ふ。⁴⁰過ちを思ひて改めざる、之を体を失ふと謂ふ。失体喪心の人、禍乱の及ぶ所なり。君子これを舍つ。⁴¹周書に言へる有り、「人水に鑑みることなくして人に鑑みるなり」と。鑑なる者は以て形を察すべく、言なる者は以て徳を知るべし。小人は其の面⁴²の子都に及ばざるを恥ぢ、君子は其の行ひの堯舜に及ばざるを恥づるなり。故に小人は明鑑を尚び、君子は至言を尚ぶ。至言や、賢友に非ずんば、則ち之を取るところ無し。故に君子必ず賢友を求むるなり。詩に曰く、「木を伐ること丁⁴³たり、鳥鳴くこと嚶嚶⁴⁴たり。幽谷より出で、喬木に遷る」と。言ふところは朋友の義、務め切直以て善道に升すに在りとなり。故

に君子^④ 己に如かざる者を友とせず。彼を羞ぢて我を大とするに非ざるなり。己に如かざる者は、己を須ちて植^たつ者なり。然らば則ち人を扶けて暇あらず。將に誰か我を相^{たす}けんとせんや。吾の僨^{たふ}るるや、亦た日無けん。故に墳^{ひく}庫^くければ則ち水縦^{みだ}れ、友邪なれば則ち己僻なり。是を以て君子 友を取るに慎むなり。孔子曰く、「居りて賢友を得るは、福の次なり」と。夫れ賢者は、言 聴くに足り、貌 象るに足り、行 法るに足る。しかのみならず善^⑤く人の美を奨めて好^{よく}く人の過ちを損る。其の隠さざるや影の如く、其の諱まざるや響の如し。故に我の之を憚ること、嚴^⑥君の堂に在り、神明の室に処るが若し。不善を為さんと欲すと雖も、其れ敢てせんや。故に益さんことを求むる者の居遊するや、必ず畏るる所に近づきて易^{あなど}る所に遠ざかる。詩に云ふ、「爾の輔を棄つる無く、爾の輻^まを員^ます。屢しば爾の僕を顧みれば、爾の載^まを輸^まさず」と。賢^⑦に親しみ助けを求むるの謂なり。

注

- (1) 事莫貴乎有驗云云 『法言』問神篇「君子之言、幽必有驗乎明、遠必有驗乎近、大必有驗乎小、微必有驗乎著、無驗而言之謂妄、」なお「無徵」という表現は、『中庸』に「上焉者、雖善無徵、無徵不信」と見える。
- (2) 水之寒也 『白虎通義』五行篇「五行之性、火熱水寒、」
- (3) 金石之堅剛也 少し遅れるが、王弼の『周易』姤卦初六の注に、「金者堅剛之物」とある。
- (4) 孔子曰云云 出典不明。『孔子集語』五性篇に收録。
- (5) 徵言 或いは「言ふことなく」と讀めなくもないが、やや無理であろう。
- (6) 篤行之 『禮記』中庸篇「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之、」 同儒行篇「篤行而不倦、幽居而不淫、」
- (7) 著明 『周易』繫辭上傳「懸象著明、莫大乎日月、」 『史記』太史公自序「我欲載之空言、不如見之於行事之深切著明也、」

- (8) 根深而枝葉茂 『新語』術事篇「養其根者、則枝葉茂、」 易曰云云 恆卦の卦辭。「久於其道也」は大象の文。或いはここまでが『易』の引用か。
- (9) 伊尹放太甲 『孟子』盡心上篇「伊尹曰、予不狎于不順、放太甲於桐、民大悅、」 なお偽古文であるが、『尚書』太甲篇序に「太甲既立不明、伊尹放諸桐、三年復歸于亳」とあり、また『竹書紀年』にも「仲壬崩、伊尹放太甲于桐、乃自立」とある。
- (11) 展季覆寒女 展季は即ち柳下惠のこと。『毛詩』小雅・巷伯傳「魯人有男子獨處乎室、隣之釐婦亦獨處乎室、夜暴風雨至而室壞、婦人趨而託之、男子閉戶而不納、婦人自牖與之言曰、子何爲不納我乎、男子曰、吾聞之也、男子不六十不問居、今子幼、吾亦幼、不可以納子、婦人曰、子何不若柳下惠然、嫗不逮門之女、國人不稱其亂、男子曰、柳下惠固可、吾固不可、吾將以吾不可學柳不惠之可、孔子曰、欲學柳下惠者、未有似於是也、」徐氏には他に基づくところがあるのかもしれないが、もしこの文章に據るならば、彼は毛詩をも學んでいたことになる。

- (12) 不稱淫篡 前注參照
- (13) 積之於素 王慶「四子講德論」「非有積素累久之歡、皆塗觀卒遇而以爲親者也、」(『文選』卷五一)
- (14) 子思曰云云 校記(五)參照。また『淮南子』繆稱訓に「同言而民信、信在言前也、同令而民化、誠在令外也」とある他、同様の文は『文子』精誠篇・『劉子新論』履信篇にも見える。さらに『顏氏家訓』序致篇には「同言而信、信其所親、同命而行、行其所服」とある。これらの敘述は主として『淮南子』に基づくものである。
- (15) 謗言 『左傳』成公十八年「民無謗言、」
- (16) 誰謂華岱之不高云云 「之」は主格を表す助字であるから、「誰か華岱の高からず、江漢の長からずと謂はんや」と讀むのが正しいが、日本語として不自然なので、便宜上、上のごとく讀んでおく。
- (17) 將何患矣 舊來このような場合、「はた何をか患へん」と讀むことが多いが、普通に再讀文字として讀んでよいと思われる。
- (18) 求己而不求諸人 『淮南子』繆稱訓「無諸己求諸人、古今未之間也、同言而民信、信在言前也、同令而民化、誠在令外也、情以先之也、動於上不應於下者、情與令殊也、」また注(20)參照。
- (19) 自強 『禮記』學記篇「知困、然後能自強也、」
- (20) 子思曰云云 『淮南子』繆稱訓「故怨人不如自怨、求諸人不如求諸己也、聲自召也、貌自示也、名自命也、文自官也、無非己者、操銳以刺、操刃以擊、何怨乎人、」
- (21) 疏遠附之 『論語』子路篇「葉公問政、子曰、近者說、遠者來、」なお「疏遠」の用例は『韓非子』孤憤篇ほか数多い。
- (22) 安樂 『呂氏春秋』舉難篇「聽臣之言、國必廣大、身必安樂、」『國語』晉語四「民生安樂、誰知其它、」
- (23) 自生民以來 『孟子』公孫丑上篇「自。有。生。民。以。來、未。有。孔。子。也、」殷紂爲天子而稱獨夫 『荀子』議兵篇「誅桀紂、若誅獨夫、故泰誓曰、獨夫紂、」(偽古文の『尚書』泰誓下篇は「獨夫受」に作る。)
- (24) 『孟子』梁惠王下篇「賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘、殘賊之人、謂之
- (25) 一夫、聞誅一夫紂矣、未聞弑君也、
- 仲尼爲匹夫而稱素王 『漢書』董仲舒傳「孔子作春秋、先正王而繫萬辭、見素王之文焉、」 『說苑』貴德篇「(孔子)於是退作春秋、明素王之道、以示後人、」なお『陔餘叢考』卷二「素王」の條參照。
- (26) 君子不降席而追道 『淮南子』繆稱訓「在混冥之中、不可諭於人、故舜不降席而天下治、桀不下陛而天下亂、」又「故舜不降席而匡天下者、求諸己也、」但し、徐氏が君子がいつでも道を追するをいうのに對し、『淮南子』は舜の無爲の治を稱しており、少しニュアンスが異なっている。
- (27) 德化光矣 『周易』坤卦文言「含萬物而化光、」 『漢書』賈誼傳「道之以德教者、德教治而民氣樂、」
- (28) 相彼玄鳥云云 逸詩であろう。「相彼玄鳥」は下の小宛の「相彼脊令」と相似た表現。「止于陵阪」は小雅・蟋蟀に「蟋蟀黃鳥、止于丘阿(隅・側)」と見える。
- (29) 仁道在近云云 『孟子』離婁上篇「道。在。邇。而。求。諸。遠、」『淮南子』主術訓「道在易而求之難、驗在近而求之遠、故不得也、」 「無遠」の無は語助。
- (30) 明乎此云云 意味がよくわからないが、この道理を明知すればすなわち聖人であり、もはや君子たらんと務めるまでもなく、この道理に不明であれば、最も愚であって小人とさえみなすことはできぬの意か。別解として、この道理を知る者は君子もそれに加えるものではなく、この道理に暗い者は、小人もそれより得るところは何もないとも考えうる。
- (31) 帝舜屢省 『尚書』虞書・益稷篇「皋陶拜手稽首聽言曰、念哉、率作興事、慎乃憲、欽哉、屢省乃成、欽哉、」普通は「屢しは乃の成せるを省み」と讀むが、徐氏は或いは「屢しは省みれば乃ち成る」と讀んだのかもしれない。なおこの篇は本來は皋陶謨篇に屬すべきもの。禹拜昌言 『尚書』虞書・皋陶謨篇「禹拜昌言曰、喩、」(今文は「黨言」或いは「讜言」に作る。) 同益稷篇「帝曰、來禹、汝亦昌

言。』『孟子』公孫丑上篇「禹聞善言則拜。」

- (33) 厲王蒙戮 『國語』周語上「厲王虐、國人謗王、召公告王、……王不聽、於是國人莫敢出言、三年乃流王于彘、」 事また『史記』周本紀に見ゆ。

- (34) 吳起刺之 『史記』吳起傳「及悼王死、宗室大臣作亂而攻吳起、吳起走之王戸而伏之、擊起之徒、因射刺吳起、并中悼王、」

- (35) 曾子曰云云 出典不明。『曾子家語』三省篇に收録。

- (36) 君子服過也云云 主として『論語』を踏まえているのであろうが（たとえば子張篇「君子之過也、如日月之食焉、」、ただ子張篇には「小人之過也、必文」とあり、少しニュアンスの異なる點がある。なお服は服罪の服の意。

- (37) 恐不逮 『禮記』樂記篇「恐不逮事、」

- (38) 詩曰云云 小雅・小宛の文。『潛夫論』讀學篇に「詩云、題彼鵲巢、載飛載鳴、我日斯邁、而月斯征、夙興夜寐、無忝爾所生、是以君子終日乾乾進德修業者、非直爲博己而已也、蓋乃思述祖考之令問、而以顯父母也」とあり、陳喬樞はこれも魯詩説だと云うが、是と思われる。

- (39) 聞過而不改 『論語』衛靈公篇「過而不改、是謂過矣、」

- (40) 喪心 『左傳』昭公二十五年「哀樂而樂哀、皆喪心也、心之精爽、是謂魂魄、魂魄去之、何以能久、」

- (41) 周書有言云云 『尚書』周書・酒誥篇「古人有言、人無於水監、當於民監、」（皮錫瑞はこの文に據りて、今文は毋に作り鑒に作るという）『國語』吳語「申胥諫吳王曰、王盍亦鑑於人、無鑑於水、」

また『墨子』非攻中篇（鏡に作る）・『戰國策』などにも同様の文が見える。

- (42) 子都 『孟子』告子上篇「至於子都、天下莫不知其姣也、」『詩』鄭風・山有扶蘇「不見子都、乃見狂且、」 傳「子都、世之美好者也、」

- (43) 明鑒 『新書』胎教篇「明鑑所以照形、往古所以知今也、」

- (44) 至言 『呂氏春秋』異實篇「以和氏之璧、道德之至言、以示賢者、賢者必取至言矣、」 他にも用例は多い。

- (45) 詩曰云云 小雅・伐木の文。王先謙云、「徐用魯詩、以遷于喬木、喻

- (46) 切道 『爾雅』釋詁篇「丁丁嚶嚶、相切直也、」

- (47) 君子不友不如己者 『論語』學而篇「主忠信、無友不如己者、過則勿憚改、」

- (48) 孔子曰云云 出典不明。『孔子集語』交道篇に收録。

- (49) 善獎人之美云云 『論語』顏淵篇「君子成人之美、不成人之惡、」『穀梁傳』隱公元年「春秋成人之美、不成人之惡、」

- (50) 嚴君 『後漢書』張湛傳「矜嚴好禮、雖遇妻子、若嚴君焉、」

- (51) 爲不善 『禮記』大學篇「小人間居爲不善、無所不至、」

- (52) 詩云云云 小雅・正月の文。
- (53) 親賢求助之謂也 前章に「載輸爾載、將伯助予」とあるのを踏まえた解釋であるが、恐らく魯詩説であらう。

貴言第六

君子必貴其言。貴其言。則尊其身。尊其身。則重其道。重其道。所以立其教。言費則身賤。身賤則道輕。道輕則教廢。故君

子非其人。則弗與之言。若與之言。必以其方。農夫則以稼穡。百工則以技巧。商賈則以貴賤。府史則以官守。大夫及士。則以法制。儒生則以學業。故易曰。艮其輔。言有序。不失事中之謂也。若夫父慈子孝。姑愛婦順。兄友弟恭。夫敬妻聽。朋友必信。師長必教。有司日月慮知乎州閭矣。雖庸人。則亦循循然與之言此可也。過此而往。則不可也。故君子之與人言也。使辭足以達其知慮之所至。事足以合其性情之所安。弗過其任而強牽制也。苟過其任而強牽制。則將昏瞶委滯。而遂疑君子以爲欺我也。不則曰。無聞知矣。非故也。明偏而示之以幽。弗能照也。聽寡而告之以微。弗能察也。斯所資於造化者也。雖曰無訟。其如之何。故孔子曰。可與言而不與之言。失人。不可與言而與之言。失言。知者不失人。亦不失言。夫君子之於言也。所致貴也。雖有夏后之璜。商湯之駟。弗與易也。今以施諸俗士。以爲志誣而弗貴聽也。不亦辱己而傷道乎。是以君子將與人語。大本之源而談性義之極者。必先度其心志。本其器量。視其銳氣。察其墮衰。然後唱焉以觀其和。導焉以觀其隨。隨和之徵。發乎音聲。形乎視聽。著乎顏色。動乎身體。然後可以發邇而步遠。功察而治微。於是乎闡張以致之。因來以進之。審諭以明之。雜稱以廣之。立準以正之。疏煩以理之。疾而勿迫。徐而勿失。雜而勿結。放而勿逸。欲其自得之也。故大禹善治水。而君子善導人。導人必因其性。治水必因其勢。是以功無敗而言無棄也。荀卿曰。禮恭。然後可與言道之方。辭順。然後可與言道之理。色從。然後可與言道之致。有爭氣者。勿與辨也。孔子曰。君子然後能貴其言貴其色。小人能乎哉。仲尼荀卿。先後知之。問者曰。或有周乎上哲之至論。通乎大聖之洪業。而好與俗士辨者何也。曰。以俗士爲必能識之故也。何以驗之。使彼有金石絲竹之樂。則不奏乎聾者之側。有山龍華蟲之文。則不陳乎瞽者之前。知聾者之不聞也。知瞽者之不見也。於己之心。分數明白。至與俗士而獨不然者。知分數者不明也。不明之故何也。夫俗士之牽達人也。猶鶉鳥之欺孺子也。鶉鳥之性。善近人。飛不峻。行不速也。蹲蹲然似若將可獲也。卒至乎不可獲。是孺子之所以跼膝跪足而不爲弊也。俗士之與達人言也。受之雖不肖。拒之則無說。然而有贊焉。有和焉。若將可寤。卒至乎不可寤。是達人之所以乾唇竭聲而不舍也。斯人也固達之蔽者也。非達之達者也。雖能言之。猶夫俗士而已矣。非惟言也。行亦如之。得其所則尊榮。失其所則賤辱。昔倉梧嬈娶妻美。

而以與其兄。欲以爲讓也。則不如無讓焉。尾生與婦人期於水邊。水暴至。不去而死。欲以爲信也。則不如無信焉。葉公之黨。其父攘羊而子證之。欲以爲直也。則不如無直焉。陳仲子不食母兄之食。出居於陵。欲以爲潔也。則不如無潔焉。宗魯受齊豹之謀。死孟縶之難。欲以爲義也。則不如無義焉。故凡道。蹈之既難。錯之益不易。是以君子慎諸己。以爲往鑒焉。

校記

- (一) 「有司日月慮知乎州閭矣」，按文義不明，蓋有脫誤，俞云：「知，衍字，慮讀爲據，司馬相如對禪文，據之無窮，此慮字，義與彼同，言上文所陳父慈子孝諸事，則有司固已日月據之州閭矣，周官州長諸職，所謂屬民讀灋，卽此事也，後人不知慮爲據之段字，不得其解，因下文有達其知慮句，妄加知字，殊失之矣。」梁氏云：「知恐非衍字，疑是之音誤耳。」按兩說並未確，今姑依舊。
- (二) 「邇」，胡本同，杜本·程本空格，何本·王本·子書本·百子本並補「幽」字，非。
- (三) 三「然」字，今本荀子並作「而」。
- (四) 「辨」今本荀子作「辯」。
- (五) 胡本同，他本君上皆有「惟」字，按有者雖固可通，而無亦不害文義，今姑依舊。
- (六) 原文無「行」字，御覽卷九二四引作「飛不迅，行不速」，按有行字乃文義足，今據御覽補，作迅，則與下文速字重複，非是。
- (七) 「卒至乎不可獲」，御覽引作「故孺子逐之不已」。
- (八) 胡本同，他本不下皆有「以」字。
- (九) 「若將可寤，卒至乎不可寤」，御覽引作「以將可悟，終難可移」，梁氏云：「以，疑當作似，悟寤古通用。」
- (十) 「達人之所以乾唇竭聲而不舍也」，御覽引作「達人所以緩唇鳴聲而不舍也」。
- (十一) 「嬌」原文作「丙」，札記云：「按淮南子汜論訓作倉梧繞，家語（六本篇）作嬌，說苑建本論但云蒼梧之弟，此云倉梧丙，未知何據。」札遂云：「案丙與繞嬌，形聲並遠，疑當作丙，一切經音義三云，集韻，丙，猥也，從市從人，作閹俗，蓋嬌丙，古今字，集韻三十六效，閹嬌同紐，說文無內閹二字，閹見新附，……徐書本作嬌，傳寫或作丙，又譌作丙耳。」按孫說是也，今從而改。

言を貴ぶ第六

君子は必ず其の言を貴ぶ。其の言を貴べば則ち其の身を尊くし、其の身を尊くすれば則ち其の道を重んず。其の道を重んずるは、其の教へを立つる所以なり。言費さるれば則ち身賤く、身賤しければ則ち道軽く、道軽ければ則ち教へ廃せらる。故に君子 其の人に非ずんば、則ち之と言はず。若し之と言はば、必ず其の方を以てす。農夫には則ち稼穡を以てし、百工には則ち技巧を以てし、商賈には則ち貴賤を以てし、府史には則ち官守を以てし、大夫及び士には則ち法制を以てし、儒生には則ち学業を以てす。故に易に曰く、「其の輔に良まる。言に序有り」と。事の中を失はざるの謂なり。若し夫れ父慈にして子孝に、姑愛して婦順ひ、兄友にして弟恭に、夫敬して妻聴き、朋友必ず信あり、師長必ず教ふるは、有司日月に州閭に慮知せり。庸人と雖も、則ち亦た循循然として之と此を言ひて可なり。此を過ぎてより往は則ち不可なり。故に君子の人と言ふや、辞をして以て其の知慮の至る所に達するに足らしめ、事をして以て其の性情の安んずる所に合ふに足らしむ。其の任を過ぎて強ひて牽制せざるなり。苟も其の任を過ぎて強ひて牽制せば、則ち將^{かなら}ず昏瞽委滞して、遂に君子を疑ひて以て我を欺くと為さん。しからざれば則ち曰く、「聞知すること無し」と。非なるが故なり。明偏れるに而も之に示すに幽を以てせば、照らすこと能はざるなり。聴くこと寡なきに而も之に告ぐるに微を以てせば、察すること能はざるなり。斯れ造化に資る所の者なり。訟ふこと無しと曰ふと雖も、其れ之を如何せん。故に孔子曰く、「与に言ふべくして之と言はざれば人を失ひ、与に言ふべからずして之と言へば言を失ふ。知者は人を失はず、亦た言も失はず」と。夫れ君子の言に於けるや、貴を致す所なり。夏后の璜・商湯の駟有りと雖も、与て易へざるなり。今以て諸を俗士に施さば、以て志誣ふと為して聴くを貴ばざるなり。亦た己を辱しめて道を傷はずや。是を以て君子 將に人と大本の源を語り、性義の極みを談ぜんとする者は、必ず先づ其の心志を度り、其の器量に本づけ、其の鋭気を視、其の墮衰を察し、然る後に焉を唱へて以て其の和するを觀、焉を導きて以て其の随ふを觀る。随和の徴、音声に発し、視聴に形れ、顔色に著れ、身体に動き、然る後に以て邇^よきより発して

遠きに歩み、察^{あき}らかなるに功^{つと}めて微を治む可し。是に於てか闔張して以て之を致し、来に因りて以て之を進め、審³²かに論して以て之を明らめ、雜え稱へて以て之を広め、準を立てて以て之を正し、煩を疏して以て之を理む。疾くするも迫ること勿く、徐ろにするも失ふこと勿く、雜なるも結ばるること勿く、放なるも逸すること勿し。其の之³³を自得せんことを欲するなり。故に大禹は善く水を治め、君子は善く人を導く。人を導くには必ず其の性に因り、水³⁴を治むるには必ず其の勢に因る。是を以て功敗ること無くして言棄てらるること無きなり。荀卿³⁵曰く、「礼恭にして然る後に与に道の方を言ふべく、辞順にして然る後に与に道の理を言ふべく、色従ひて然る後に与に道の致^{きは}みを言ふべし。争氣有る者は、与に辨ずること勿かれ」と。孔子³⁶曰く、「君子にして然る後に能く其の言を貴び其の色を貴ぶ。小人は能くせんや」と。仲尼・荀卿、先後に之を知る。問ふ者曰く、「或いは上哲³⁷の至論³⁸に周く、大聖³⁹の洪業⁴⁰に通じて、而も好んで俗士と辨ずる者有るは何ぞや」と。曰く、「俗士を以て必ず能く之を識ると為すが故なり。何を以て之を驗せん。使^もし彼に金石糸竹の楽有らば、則ち聾者の側に奏さず。山竜華虫の文有らば、則ち瞽者の前に陳せず。聾者の聞こえざるを知り、瞽者の見えざるを知ればなり。己の心に於て分数明白なり。俗士と与にするに至りては独り然らざる者は、分数を知る者^{こと}明らかならざればなり。明らかならざるの故は何ぞや。夫れ俗士の達人を牽くや、猶ほ鶉鳥の孺子を欺くがときなり。鶉鳥の性、善く人に近づき、飛ぶこと峻からず、行くこと速からざるなり。蹲⁴⁴蹲然として将に獲ふべからんとするが似^{ごと}若きも、卒に獲ふべからざるに至る。是れ孺子の膝⁴⁵を蹴にし足を蹴^かめて而も弊と為さざる所以なり。俗士の達人と言ふや、之⁴⁶を受くるは肯てせずと雖も、之を拒むは則ち説無し。然り而うして焉に賛する有り、焉に和する有り。将に寤るべからんとするが若くにして、卒に寤るべからざるに至る。是れ達人の唇を乾かし声を竭くして而も舍^やめざる所以なり。斯⁴⁷の人や、固より達の蔽なる者なり。達の達なる者に非ざるなり。能く之を言ふと雖も、猶ほ夫^かの俗士のごときのみ。惟だに言のみに非ざるなり。行ひも亦たかくの如し。其の所を得れば則ち尊榮に、其の所を失へば則ち賤辱なり。昔 倉梧⁴⁸嬈 妻を聚るに美なれば、而して以て其の兄に与ふ。以て譲を

為さんと欲するも、則ち譲無きに如かず。尾生⁽⁴⁹⁾ 婦人と水辺に期するに、水暴^{には}かに至るも去らずして死す。以て信を為さんと欲するも、則ち信無きに如かず。⁽⁵⁰⁾ 葉公の党、其の父 羊を攘みて子之を証す。以て直を為さんと欲するも、則ち直無きに如かず。陳仲子⁽⁵¹⁾ 母兄の食を食らはず、出でて於陵に居る。以て潔を為さんと欲するも、則ち潔無きに如かず。宗魯⁽⁵²⁾ 齊豹の謀を受け、孟縵の難に死す。以て義を為さんと欲するも、則ち義無きに如かず。故に凡そ道は、之を蹈むこと既に難く、之に錯^をること益ます易からず。是を以て君子 諸^{これ}を己に慎み、以て往鑑と為す。

注

- (1) 『尸子』(孫星衍輯本および汪繼培輯本)に貴言篇があるが、内容は諫言を善みするといふもので、本篇とは直接的關係はない。また後世のものではあるが、『劉子新論』にも貴言篇がある。
- (2) 君子必貴其言 『法言』吾子篇「君子之所慎、言、禮書、」又「何謂四重、曰、重言、重行、重貌、重好、言重則有法、」なお「貴言」という語は『老子』第十七章に見える。
- (3) 立其教 『漢書』武帝紀「古之立教、鄉里以齒、朝廷以爵、」
- (4) 言費 『禮記』緇衣篇「口費而煩、」 『法言』吾子篇「言輕則招憂、」
- (5) 弗與之言 『孟子』離婁上篇「自暴者不可與有言也、」
- (6) 百工 『周禮』考工記「國有六職、百工與居一焉、」 『孟子』滕文公上篇「百工之事、固不可耕且爲也、」
- (7) 府史 『周禮』各官の下にそれぞれ府史がいるが、ここは一般の下級官吏の意。『儀禮』士冠禮注に「府史以下、今時卒吏及假吏是也」とある。
- (8) 官守 『左傳』昭公二十三年「信其鄰國、慎其官守、」 『孟子』公孫丑下篇「有官守者、不得其職則去、」
- (9) 法制 『禮記』月令篇「命有司、修法制、繕囹圄、」 『左傳』文公六年「予之法制、告之訓典、」 『後漢書』仲長統傳「君子用法制、」

- (10) 易曰云云 艮卦六五の爻辭。
- (11) 不失事中之謂也 同右「象曰、艮其輔、以中正也、」
- (12) 父慈子孝云云 『左傳』昭公二十六年「君令臣共、父慈子孝、兄愛弟敬、夫和妻柔、姑慈婦聽、禮也、」 『禮記』禮運篇「父慈子孝、兄良弟弟、夫義婦聽、長惠幼順、君仁臣忠、十者謂之人義、」
- (13) 朋友必信 『孟子』滕文公上篇「父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、」
- (14) 師長 『韓非子』五蠹篇「今有不才之子、……師長教之弗爲變、」 『周禮』地官・師氏「三曰順行、以事師長、」
- (15) 有司日月慮知乎州閭矣 役人が常時村里を巡り、上記の道が行われるよう取計いかつ治めることをいうのであろう。
- (16) 循循然 『論語』子罕篇「夫子循循善誘人、」 集解「循循、次序貌、」
- (17) 過此而往 『周易』繫辭下傳「過此以往、未之或知也、」
- (18) 性情 情性に同じ。生まれつきの心のおもむき。
- (19) 委滯 とどこおること。
- (20) 非故也 文義未詳。恐らく脱文があるのであろう。「非其任故也」とか「非無故也」とでもすべきところと思われる。強いて「ことさらに非ざるなり」と讀むことも不可能ではないが、やはり少し無理であろう。
- (21) 斯所資於造化者也 生まれつき能力のない者は仕方がないという意

- 味であろう。
- (22) 雖曰無訟云云 文義未詳。君子と論争しようとしなが、それではどうしようもないという意味か。「無訟」という表現は『論語』顔淵篇「必也使無訟乎」と想起させるが、ここには當てはまらないようである。
- (23) 孔子曰云云 『論語』衛靈公篇の文。
- (24) 夏后之璜 『左傳』定公四年「分魯以大路・大旂・夏后氏之璜……」同哀公十四年「向魋出於衛地、公文志攻之、求夏后氏之璜、」『淮南子』精神訓「有夏后氏之璜者、匣匱而藏之、寶之至也、」商湯之駟 湯王の馬車を寶物とすることは他に見えない。
- (25) 大本 『禮記』中庸篇「中也者、天下之大本也、」『公羊傳』隱公元年注「天、人之大本、萬物之所繫、」
- (26) 心志 『孟子』告子上篇「天將降大任於是人、必先苦其心志、」『禮記』祭義篇「心志嗜欲、不忘乎心、」
- (27) 器量 蔡邕「郭有道碑文」「器量弘深、姿度廣大、」(『文選』卷五八)
- (28) 銳氣 『史記』淮陰侯傳「銳氣挫於險塞、」
- (29) 隨和 『漢書』梅福傳「求黨與、索隨和、」
- (30) 發邇而步遠 『周易』繫辭上傳「行發乎邇、見乎遠、」
- (31) 審識 『禮記』文王世子篇「少傅奉世子、以觀大傅之德行、而審識、」
- (32) 欲其自得之也 『孟子』離婁下篇「君子深造之以道、欲其自得之也、」
- (33) 治水必因其勢 蔡邕「胡公碑」「敷土導川、俾順其性、」(『蔡中郎集』卷四)
- (34) 荀卿曰云云 『荀子』勸學篇の文。
- (35) 孔子曰云云 出典不明。『孔子集語』五性篇に收録。
- (36) 上哲 崔駰「達志」「誦上哲之高訓、詠太平之清風、」(『後漢書』本傳)

- (38) 至論 『漢書』董仲舒傳「欲聞大道之要、至論之極、」班固「幽通賦」「所貴聖人至論、今、」(『文選』卷十四)
- (39) 大聖 『禮記』樂記篇「禮備而不偏者、其唯大聖乎、」
- (40) 洪業 班固「典引」「宏亮洪業、表相祖宗、贊揚迪岳、」(『文選』卷四八)
- (41) 金石絲竹 偽作だが、孔安國「尚書序」に「王又升孔子堂、聞金石絲之音」とある。また『左傳』襄公九年に「金石之樂」とある。
- (42) 山龍華蟲之文 『尚書』虞書・皋陶謨篇「日・月・星・辰・山・龍・華・蟲・作會、」
- (43) 分數 物事のけじめをつける道理。
- (44) 蹲踞然 緩かなさま、もしくは人なつこいさまであろう。『詩』伐木や揚雄「河東賦」に用例が見えるが、ことは合わない。
- (45) 踞膝 一應ひざをしもやけにすると解しておくが、少し疑問が残る。受之雖不肖云云 文義通じ難い。恐らく脱誤があるのであろう。或いは「受之雖不肖拒之」で句か。下句も「之を拒めば則ちよろこぶ」と無し」とも讀める。
- (46) 斯人也固達之蔽者也 俗人を相手にしているようでは、まだ眞の達人とは言えないということ。
- (47) 倉梧嬈聚妻美云云 『淮南子』汜論訓「昔倉梧嬈聚妻而美、以讓兄、此所謂忠愛而不可行者也、」高注「蒼梧嬈、孔子時人、以妻美好、推與其兄、於兄則愛矣、而違親近曲顧之義、故曰不可行也、」なお校記(十一)参照。
- (48) 尾生與婦人期於水邊云云 『戰國策』燕策一「信如尾生、期而不來、抱梁柱而死、」事また『史記』蘇秦傳・『莊子』盜跖篇に見ゆ。文章はむしろそれらの方が近い。
- (49) 葉公之黨云云 『論語』子路篇「葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘父而子證之、孔子曰、吾黨之直者異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣、」事また『韓非子』五蠹篇・『呂氏春秋』當務篇等に見ゆ。なお、直躬と尾生を一緒に論じたものに『莊子』盜跖篇・

『淮南子』汎論訓があるが、後者では蒼吾繞を續けて擧げている點からみれば、徐氏は『淮南子』を下敷にしているのかもしれない。それを次に引いておく。「直躬其父攘羊而子證之、尾生與婦人期而死之、直而證父、信而溺死、雖有直信、孰能貴之、」

(51)

陳仲子不食母兄之食云云 『孟子』滕文公下篇「匡章曰、陳仲子不誠廉士哉、居於陵、三日不食、耳無聞、目無見也、……孟子曰、於齊國之士、吾必以仲子爲巨擘焉、雖然、仲子惡能廉、充仲子之操、則蚓而後可者也、……仲子齊之世家也、兄戴蓋祿萬鍾、以兄之祿爲不義之祿、而不食也、以兄之室爲不義之室、而不居也、辟兄離母、處於於陵、

(52)

他日歸、則有饋其兄生鵝者、己頻顙曰、惡用是醜醜者爲哉、他日其母殺是鵝也、與之食之、其兄自外至曰、是鵝鵝之肉也、出而哇之、以母則不食、以妻則食之、以兄之室則弗居、以於陵則居之、是尙爲能充其類也乎、」

宗魯受齊豹之謀云云 『左傳』昭公二十年「齊氏用戈擊公孟、宗魯以背蔽之、斷肱、以中公孟之肩、皆殺之、……琴張聞宗魯死、將往弔之、仲尼曰、齊豹之盜、而孟縶之賊、女何弔焉、君子不食姦、不受亂、不爲利疚於同、不以同待人、不蓋不義、不犯非禮、」

(未完)